
魔法少女なのは マギカW ~希望の道標~

灸CARVE

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女なのは マギカW 希望の道標

【Nコード】

N2795W

【作者名】

灸CARVE

【あらすじ】

魔法少女、終わらせます。

平凡だった小学生、『高町なのは』。

不思議な動物『キュウベえ』と契約して魔法少女となった彼女は、

『ジュエルシード事件』に巻き込まれるなかでその真実を知り、

結果として悲惨な運命からは逃れ、そして大切な友達を得たのだった。

その後魔法少女を待ち受けるはずだった運命は、一人の少女の”犠牲”により断ち切られたという…。

だが、もしも…そこに別の未来があつたなら？

なのはが一旦回避した残酷な未来。しかし、現実から逃れることは許されていなかった…。

再び直面することになる運命。またもや避けられない戦いに身を投じる少女達。

時を同じくして、一人の魔法少女が時空を歪める。大切な人を守るために。

あつてはならないはずだった、彼女達の邂逅。それが現実となった時…

最終決戦の幕が、切つて落とされようとしていた。

『魔法少女なのは マギカW』…はじまります。

#0「序章」(前書き)

どうも、僭越ながら書かせていただいている灸CARVEです。
前作「魔法少女なのは マギカ」の消化不良っぷりが恥ずかしくな
り、続編を書いた次第です。

尚、今作にはちゃんとまどかのキャラも結構出るのでご安心を。

最後に、これは完全な不定期更新です。
でもエターナることは無いと思います

#0「序章」

#0「序章」

…私は、なんと無力なんだろう。

少女には、大切な人がいた。

少女は、彼女を守るために戦ってきた。

何度負けても、何度諦めかけても、少女は戦い続けた。何度も、何度も…

しかし、少女は勝てなかった。

あらゆる武器を持っても、あらゆる策を尽くしても、勝てなかった。武器を持つ手が動かない。逃げるための足さえ動かすことができない。

少女の心は、折れかけていた。

「…ちゃん！ほむらちゃん！！」

薄れ行く意識の中、かすかに聞こえる声。

それはまぎれもなく、守りたかった彼女の声だった。

「…まど、か…、来ちゃ、だめ…っ！」

彼女は決意の眼差しで少女を見つめる。

「ごめんね、ほむらちゃん…でも、もう大丈夫だから」

「いや…いやあ…っ」

少女には、彼女が何をしようとしているのか分かった。

そしてそれは、最も恐れていること。

「お願い、やめて…っ!!」

「…ううん、やめられない。だって、私が一生懸命考えて出した答えだもん」

「…ッ!!」

それが何を意味するのか、彼女にも分かっていたはずだった。しかし、それでも彼女はその道に進む。彼女もまた、少女を守りたかった。

…少女の知る彼女とはこういう子だ。誰よりも優しく、勇気のある子だった。

「…さあ、まどか。その魂を犠牲にして君は何を願う？」

彼女の横にいる…死の商人。全ての元凶にして、彼女の優しさを利用しようとしている…少女の仇敵。

世界中の何よりも憎いそれを、少女は睨み付ける。これ以上無いくらいに憎しみを込めて。

…こうして奴を睨むのも、何回目だろうか。

少女は、ずっとそれに踊らされていた。そして今も、自らの敗北を味わっている。

しかし、彼女はそうではなかった。その眼は…希望に溢れた未来を見据えていた。

そして彼女は願いを言い放つ。

「今度こそ…今度こそ、ほむらちゃんにハッピーエンドをつ…!!」

彼女の願いが、どのような奇跡を起こしたのかは…彼女自身にも分からなかった。

しかし、それは確かに運命を大きく動かしていた。彼女の力とはそれほど大きなものだった。

もしかしたら、少女が幸せになる…無数の世界を生み出してしまったのかもしれない。

これは、多くの世界のひとつかもしれない…また、唯一の幸せな世界なのかもしれない物語。

#1「平和」（前書き）

序章で書いたとおり、この世界は前作エピソードとは違う世界線です。

具体的には前作からダイバージェンス1%程度離れた感じ。
ちなみにタイトルの「W」はwishね。

第一話は回想回。導入ですね

#1「平和」

#1「平和」

どこかにある、海に面した町…海鳴市。

賑やかな市街地から離れた所には丘や天然林が広がっており、自然保護区域に指定されているところも少なくない。

こういったところは当然ながら、自然公園として広く市民に親しまれている。

小さい子供が遊んだり、若者達がデートや散歩を楽しんだり、ランニングやテニス等のトレーニングに利用されたり…

「なのは、上だよ!」

ある日の早朝、少女の声が響く。

彼女達もこの海鳴市の自然の中でトレーニングをしていた。

「わっ!」

声に反応してもう一人の少女が上を見る。すると上から降ってくる空き缶。

短い茶色のツインテールが可愛い少女——高町なのはは、落ちてくる空き缶を眼で捉える。

…幼い少女に不釣り合いなほどの正確さで。

予想外の方向から来た空き缶に一瞬戸惑いつつも、驚くほどの冷静さで反応するのは。

「いくよ、フェイトちゃん！」

彼女は空き缶を弾き返した…

なのはも相対する少女も、ラケットのような道具は持っていない。かといって素手で空き缶を打ち返したのでもなく――

彼女は、自らの手から放った”光弾”によって、空き缶を”撃ち”返したのである。

なのはの狙い通り、斜め45度で相手に向けて飛ばされる空き缶。普通に考えれば空き缶はそのままの軌道で放物線状に飛ぶだろう。しかし、上昇する空き缶が頂点に来るより前に、それは快音を響かせると…相手の少女に向けて、猛スピードで突っ込んできた。

テニスのスマッシュを軽く超えた速度で飛ぶ空き缶。少女の身では反応さえも難しいだろう。

だが、なのはが飛ばした空き缶を見据える少女――フェイト・テスト・タロツサ・ハラオウンは、驚くどころか…空き缶の動きが変わったタネさえも見抜いていた。

…フェイトは見ていた。なのはが空き缶を撃った直後、もうひとつの光弾を放っていたところを。

桜色に輝く弾は、なのはの手から少し上昇し…斜め下に向けて急加速、空き缶を斜めに撃ち落としていたのだ。

一直線に飛んでくる空き缶に狙いを定めるフェイト。彼女は右手を構え、空き缶の飛来を待つ。

「…やつ！」

空き缶が右手に触れようとする瞬間、彼女の長い金のツインテールが摩く。

フェイトの手から放たれたのは、黄金に輝く光弾。

的確に撃たれた空き缶は、今度は地面と平行に、やはり猛スピードでなのはに向けて飛んでいく。

「はっ！」

なのはも負けじと腕を構える。今度は光弾ではなく、光の壁を生成。空き缶は斜め上に弾き返されていた。

二人の少女、なのはとフェイト。彼女達は一切その場から足を動かしてはおらず、また直接手を触れてさえいない。

空き缶を打ち返しているのは全て少女達の体から出た光…魔法なのだ。

ただの人間の常識では考えられない謎のラリー。

もし部外者が見ていたら幻覚か気のせいだと思うだろう。だが、これは紛れも無く真実。

二人はただの人間ではなく、『魔導師』である。

空き缶を光の壁で弾いて間髪入れず、なのはは光弾を両手に生成。そして真横に放つ…そしてすぐ、弾が急上昇し、空き缶の上に収束。誘導弾である。

光弾は空き缶を真下、…否、そこにいるフェイト目掛けて打ち落とす。

桜色の光を放つ少女、高町なのは。

彼女は元々普通の小学三年生であったが、ある日…魔法の世界と運命的な出会いを遂げた。勢いのまま魔法の力を手にした彼女は、すぐに命がけの戦いに身を投じることになってしまい…その時の経験から、戦いを終えた今でもこのような訓練を欠かしていないのである。

ちなみになのはが最初に手にした魔法の力は今の彼女の使う魔法とは全くの別物なのだが…これは別の機会に。

真下に降ってくる空き缶。フェイトはそれに気づくや否や、光の矢を真上に撃ち出す。しかし空き缶の中心ではなく、端の方を狙って光の矢が命中。勢いを絶やさぬまま、斜め下…なのはに向けて弾丸のようなスマッシュ。

黄金色の光を放つ少女、フェイト・テストロッサ・ハラオウン。

彼女はなのはと違い、地球ではない魔法の世界…『ミッドチルダ』出身の生粋の魔導師。

フェイトはある目的のために地球を訪れ、なのはと出会う。そこで彼女達は、古代の遺産『ロストロギア』の一種である『ジュエルシード』を巡って幾度も争い、戦った。（これは後に『ジュエルシード事件』と呼ばれている）

熟練の魔導師であるフェイトと、魔導師となったばかりだったなのは。しかしフェイトに勝つための猛特訓が功を為し、なのはは勝利。多くの戦いを経た彼女達にはいつしか友情が生まれ、彼女達は最高の友達となったのだった。

「やつぱりなのはちゃん達、ほんまに凄いなあ…。」

彼女達の激しい攻防を、遠巻きに見ている女の子がいた。

車椅子からなのは達を眺め、ある事件のことを思い出す少女…八神はやて。

彼女もなのはと同じく、かつて普通の地球人の少女であり、魔法との不思議な出会いを経験していた。

なのはとフェイトの出会いから、今となっては約一年が過ぎようと

していた。

その間には、更なる戦い…『闇の書事件』があった。

危険度の高いロストロギア…他人の魔力を喰らう魔導書『闇の書』に選ばれてしまったはやて。

闇の書に蝕まれるはやてを救うために、闇の書の完成を目指して奔走した闇の書の部下…四人の騎士『ヴォルケンリッター』。

はやてと友達になりながらも闇の書を止めるべく戦った、なのはとフェイト。

彼女達との出会いと戦いは、はやてと闇の書をその呪縛から開放し、闇の書によって引き起こされようとしていた世界の崩壊を防ぐことに成功する。

闇の書——かつては『夜天の魔導書』と呼ばれ、後にはやてに『リインフォース』と名づけられた——との別れの後、はやては残されたヴォルケンリッター達と共に、新たな人生を歩むこととなった。

そして今、なのはとフェイトには『時空管理局』お抱えの正式な魔導師にならないか…という誘いがかかっている。

時空管理局というのは、地球やミッドチルダ以外にも数多く存在する次元世界を監視し保全する大規模な組織である。ミッドチルダに本部を置くこの組織はジュエルシード事件や闇の書事件でも事態収拾に力を注いでいたため、なのは達との関わりも深い。

しかしなのはもフェイトもまだ幼いため、はつきりと決めることはまだ難しいようだった。管理局からも気長に決めるよう言われていて、彼女達は今も考えている途中だった。

ちなみに闇の書の呪いの後遺症により車椅子生活を余儀なくされているはやてにも管理局からの誘いがかかっている、ヴォルケンリッター達に至っては既に管理局で働いているという。

ちなみに今は事件らしい事件も起きていないので、少女達はのんび

りと平和を味わっていた。

観戦するはやてと、魔法のラリーを続けるなのは、そしてフェイト。……いや、どうやら決着は付いたようだった。

どうやら、なのはは自ら放った空き缶の勢いをそのまま返してきたスマッシュに反応しきれなかったらしい。

慌てて魔法の壁……シールドを出したなのはだったが、シールドの角度調整を失敗したせいで空き缶は地面に突撃してしまった。

「……今日は私の勝ちだね、なのは」
にこやかに笑うフェイト。

「あ、あはは……負けちゃった。でも明日は勝っちゃうからね！」

笑い返すなのは。彼女達は最高の友達であると同時に、良きライバルでもある。

「お疲れー」

車椅子を転がしてやってくるはやて。傍らには一人の少女がいた。

「あ、はやてちゃんにヴィータちゃん。おはようー！」

「おう、おはようっ！」

ヴィータと呼ばれた元気な少女は、ヴォルケンリッターの一人である。残りの三人は管理局に出払っているため、今日のはやての世話はヴィータの役目なのだ。

「……空気読まないでわりーけど、そろそろ着替えねーと学校遅刻すっぞ？」

「……あーっ！？もうこんな時間!？」

なのはが携帯電話を出し、大慌て。同じ状況のはずなのに、なぜかフェイトは落ち着き払っている。

「あ……じゃあなのは、着替えてくるね」

「あ、わたしもー！」

「ふふふ……」

急いで帰宅する二人。はやて達は微笑みながら見つめていた。ちなみにはやては運動しに来たわけではないため、既に制服着用、荷物

も準備してある。ヴィータは学校には通っていないため、私服だが。「しかしヴィータもよう気づくなあ…。ちよつと前よりだいぶしっかりしてきたんとちゃう？」

「ば、馬鹿！やめろよ…っ／＼／」

ヴォルケンリッターの中で最も幼いヴィータは、少し照れ屋なのだ。

「そ、そんなことより…今日転校生が来るんだってな？」

「そつえば…。一体どんな子なんだろうなあ？」

三人の少女がこれから体験する、学校での出会い。それを楽しみにしているはやて。

もちろん、大急ぎで着替えるなのは達も同じだった。

どんな子なんだろう…、友達になれるかな…。

しかし、これから訪れる出会いは、なのは達が目を背けていた存在と…再び巡り合わせることになる。

そしてそれは、再び起こる大きな戦いの引き金になるのだ…。

#2「新顔」(前書き)

オリキャラ登場。これだけで原作レイプとか言うな。

あ、ちなみに前の世界線でアリサが契約するのは小五辺りという設定。

つまり、この小説にバーニングアリサは出てきませんよ、と。

では、相変わらず文章力のない私の拙い小説ですが、よろしくお願いします。

(今回は短目かも)

#2「新顔」

#2「新顔」

「おはよー…っ」

どうにか遅刻せず、一私立聖祥大附属小学校の自分達の教室に着いたなのは。

「遅いぞなのはー！」

「ま、まーまー…」

最初に挨拶してきたのは二人のクラスメイトだった。

勝気でちよつと生意気？な少女、アリサ・バニングス。

やや大人しめな少女、月村すずか。

彼女達は昔からなのはの親友で、魔法の力を持たない一般人だ。

しかし闇の書事件の際にフェイトやはやても知り合い、すぐ友達になっていくうえに、同事件が終わった時に魔法についてもある程度は話されている。

ちなみにフェイトとはやては先に学校についていたようで、アリサとすずかに続いて挨拶をしてきた。

「おはようございまーす！今日は知っての通り、転校生がやってきましたよー！」

なのはが挨拶を終えたすぐ後に、入ってきた先生。

既に転校生の噂で持ちきりだった教室。なのはにはこの話に入る時間が用意されていなかったようで、一瞬凹んでいたようだ。

しかしすぐに立ち直り、転校生に興味を示す。

「さあ、どうぞ！」

先生の声と共に、入ってくる転校生。

「お、おはようございます…」

教室に来たのは、ややおどおどした感じの少女だった。

深い紫色の短い髪、宝石のように澄んだ青い瞳、加えて小柄で華奢な体と、保護欲が沸いてくるような…それでいてどこかミステリアスな印象。

クラスの視線の集まり具合はなかなかのものだった。

「ま、眼山つきよ…です、よろしくお願いします…」

やや俯き気味で挨拶する少女、つきよ。

「つきよちゃんは、家庭の事情で。。学校から転入してきたそうです。皆さん仲良くしてあげてね」

「前の学校どうだった!？」

「得意な教科とかない？」

「前はどんなところに住んでいたの？」

「そのキーホルダーどこで買った!？」

「後で一緒にお昼食べようっ!」

「あ、あう…」

「…デジャヴ」

紹介が終わった直後の出来事を見たのは達は、揃って同じ台詞を吐いた。

無理もなかった。過去にフェイトが留学生として私立聖祥大附属小学校に来た時も、このように猛烈な質問攻めに遭っていたのだ。とりわけ実際に質問されていたフェイトは空いた口がふさがらないように…。

なお、当時は学校に行っていなかったはずだったはやても車椅子の上で同じ反応をしていたが、これはフェイトが来た時のことを聞いていたからだ。

「あーもう、はいはい質問は順番に！フェイトのときといい全く皆つたら…」

結局、フェイトの時と同じようにアリサが仲裁するのだった…。

ほとぼりが冷めた頃になってようやく、なのは達がつきよに挨拶をする。さすがの空気の読みっぷりである。

「わたし、高町なのは。よろしくね」

「フェイト・テストロッサ・ハラウンだよ」

「八神はやてや。よろしくな」

「アリサ・バニングスよ！」

「わたしは月村すずか。仲良くしようね」

順番に挨拶する時は、決まっていたのはが最初になってしまふのは…このメンバーにおいては最早常識だった。

「あ…よろしくお願いします」

つきよも大分落ち着いてきたのか、先程よりは言葉がしっかりしている。

「えと、アリサ…さん？先ほどは…その、ありがとうございます。

あのような状況には、あまり慣れてなくて…」

しっかりして…はいたが、またもや調子がおかしくなってきた。心なしか顔が赤いところを見ると、恥ずかしいのだろう。

「いいっての。それより敬語なんて使わないでも…」

「あ、ごめんなさい…癖なんです」

どちらからともなく笑いあうアリサとつきよ。二人は早くも通じ合ったようだ。

そして昼休みには、既に六人で一緒に歩く姿があった。といっても

はやては車椅子だが。

それにしても、あつという間にここまで打ち解けることのできるなのは達のコミュ力には物凄いものがある。

「へえ…、すずかさんの家には猫さんがたくさん…少しづらやましいです」

「あ…じゃあ、今度みんなで遊びに来る？」

こんな他愛ない会話がしばらく続く。

しばらく経って、不意につきよが口を開いた。

「あ、あのっ！」

今までになくはつきりした口調で。

「私、こんな性格だから昔から友達がいなくて…、まともにお話したのはアリサさん達が初めてなんです。本当に…ありがとうございます」

真っ直ぐな瞳で話すつきよ。その心を知ってか知らずか、いつものノリでアリサが口を開く。

「なーに改まつちゃってんのよ、あたし達もう友達でしょ？」

「アリサさん…！」

つきよの目には、薄っすらと涙が浮かんでいた。

下校時刻。

なのはとフェイトは帰宅方向の違う他の四人と別れ、一緒に帰路にっていた。

「つきよちゃん、何だか変わった子だったね…」

「うん、でも話してみると結構普通だったよね。恥ずかしがり屋さんみたいだったけど」

つきよの話題で笑いあうのはとフェイト。いつしかこんな想いが浮かんでいた。

「（つきよちゃんの事、もっと知りたい…）」

友達になったばかりの彼女達にこの発想が出てくること自体は、至極当然のことといえよう。

だが、何となく…こんな考えも出てきてしまっていた。

「（彼女の^{まやまつき}ことを、これ以上知るべきではない）」

少女達にはこれが警告のようにも思えた。

しかし、その意味を理解するには…少しばかり、気が緩みすぎていたと言えよう。

#3「遭遇」(前書き)

第三話。

この話を以つてある意味ではプロローグが終わると思う。
前半の進み方は完全にアドリブで書いた。

うまくいったと思いますが、うまく行き過ぎてて
伏線関係とか怖いw

#3「遭遇」

#3「遭遇」

つきよが転入して数日。

彼女は新しい学校にも慣れ、なのは達とも互いの家に遊びに行く程度まで親しくなっていた。

「それでね、お兄ちゃんったらね…」

「ほならうちのシグナムかて負けておらへんよ、…」

今は六人ともすずかの家で遊んでいる。

ちなみにシグナムというのは、はやての守護騎士であるヴォルケンリッターの一人で、四人のリーダーである頼れるお姉さんだ。

他には母性溢れるシャマルに、唯一の男性で『守護獣』のザフィーラ、後はつきよが来た日の朝に共にいたヴィータがいる。

「…皆さん、いい家族を持っているんですね」

口を開いたつきよ。その笑顔は、どこか寂しそうだった。

「そういえば、つきよの家族ってどんなのよ？」

「…わたしのお母さんはずっと昔に死んじゃって、お父さんも単身赴任でほとんど家にいないんです」

俄かに重くなる空気。

「…ごめん」

「い、いいんです！今は皆さんがいるから寂しくありません！」

慌ててフォローを入れるつきよ。

この時の言葉は本心であると同時に何気なく言った言葉でもあったが、これを少し重く受け止めた者もいた。

「…つきよちゃん、わたしも同じや」

少し遅れて、はやてが言葉を返す。

その過去を知る四人の注目を浴びるが、かまわず言葉を続けた。

「わたしも家族は昔になくなっちゃって、ちよっと前までは一人ぼっちだったんや。

でも最近シグナムたちが来てくれて、みんなとも会えた。今は、本当に幸せや」

はやてもつきよと同じ、孤独の寂しさを知るものだった。

彼女達だけではない。なのはも幼少時代、家族に構ってもらえなかった時があった。

フエイトも実の母に冷たくされていた経験を持つ上に、友達もなのはが初めてである。

ひねくれ者だったアリサと引っ込み思案なすずかも、なのはと一悶着あってからようやく親友になった。

誰もが、つきよの気持ちを理解していたのである。

「ありがとう…ありがとう…っ！！わたし、みんなを絶対に、守ってみせますっ！」

唐突に叫んだつきよ。その意味を考えたなのは達もそれに答える。

「つきよちゃん…わたしも、つきよちゃんに何かあったら、絶対に助けるからねっ！」

「…私もだよ。つきよは大切な友達だから」

「友達が困ってる姿なんて…見とうないからな」

「悩みとかあったら、いつでも言ってね」

「あたしだって力になってみせるから！」

この時なのは達は、つきよの言った『守る』という言葉の意味を理

解していなかった。

そして、あまりにも早くそれを思い知らされることになる。

「なのは…何だか、嫌な感じがする」

「フェイトちゃんも…？」

なのはとフェイト、二人の帰路。

友達と遊んだ帰りだというのに、二人は怯えていた。

…というより、確かに感じていたのだ。不吉な存在の接近を。

危険は、唐突に訪れた。

音もなく、突然歪む世界。

「!？」

気づくとなのは達は、見たことがない世界にいた。

幻想的な、しかし吐き気を催すほど気持ちの悪い風景。

「…!？け、景色が…！」

「これって、もしかして…!!」

彼女達はこの現象を知らないわけではない。心当たりがあったのだ。しばらくすると、不気味で禍々しい影が姿を現した。出来損ないのロボットを思わせる、ゴツゴツした影。それを見て、なのは達は確信する。

「魔女の、結界…っ!!」

「ガラクタの魔女。その性質は無心。自我も本能も殆ど忘れ去り、ほぼ完全に無秩序な動きをしている。頑丈な紐などの道具を用意すれば、操り人形にできてしまうかもしれない。」

かつて…ジュエルシード事件のとき、なのは達はそれと相対していた。

絶望から生まれ、世に呪いをもたらす怪物『魔女』。

その正体を知る彼女達にとって魔女との戦いは辛いものだったが、それ以来全く現れていないために半ば忘れかけていたのだ。

日常を満喫していた少女達は、悲しい現実を思い出し…

「ど、どうしようっ！」

「なのは…可哀想だけど、やるしかない。あの子だって苦しんでいるんだから」

「…うん」

眼に涙を浮かべ、戦う決意をする。楽にしてあげるために。

「レイジングハート、お願い」

『勿論です、マスター』

なのはの武器であり相棒である魔法の杖、レイジングハート。

ミッドチルダ式の魔法を使い始めてからずっと共に戦ってきた仲間。時にはなのはに助言をしたり、訓練の監督をしたりする、頼もしい先生でもある。

ちなみに今は収納してあるため赤い球体の形態をとっている。

「いくよ、バルディッシュ」

『了解』

フェイトの武器であるバルディッシュも、主に応える。

その時だった。

「二人とも下がってくださいっ！」

後ろからの、聞きなれた少女の声。

二人は思わず振り向くが既にそこには何もなく、代わりに魔女のいる位置から爆音が響いた。

「なっ!？」

音のした方にあつたのは、粉々になった魔女の残骸と…拳を突き出した、ひとつの影。

梅紫色の炎を纏った拳、これと同じ色が散りばめられた衣装、短い紫の髪。

少女は、こちらを向いた。

「よかった…怪我はないみたいですネ」

眼鏡の奥から覗く透き通った青い瞳に、なのは達は絶句していた。

(つきよ…ちゃん…!?)

#4「困惑」(前書き)

説明回ですね、分かります。

ちなみにつきよのソウルジェムは梅紫色ですが、紫とピンクの中間色を考えたらこうなりました。

#4「困惑」

#4「困惑」

魔法少女。

なのは達魔導師とは違う存在。

彼女達は『キュウベえ』と呼ばれる不思議な生き物と契約することで魔法の力を得る。

魔法少女は契約時に一つだけ願いをかなえてもらえるが、その代償として魔女との戦いを義務付けられる。

炎拳の魔法少女、眼山つきよ…

彼女も、キュウベえと契約した一人だった。

「…私、ちよつと前まで生き甲斐が無かったんです」

ガラクタの魔女を倒した次の日。

なのは達五人は、つきよの話…魔法少女の事を聞いていた。

「できることなんてほとんどなくて、私は世の中に必要とされているのかが分からなくて思いつめていた時に、あの子が来て…私は『胸を張って生きていける位に強くなりたい』そう願いました」

つきよが懐からおもむろに何かを取り出す。

戦った時の衣装と同じ梅紫色の宝石。魔法少女の証、ソウルジェムだ。

「魔女との戦いはほとんど一人ぼっちですけど、人々を守るために戦えてて…何より、今までの何もできない自分じゃなくなってる嬉しいんです」

そう言っただけで目を下ろすと、ソウルジェムが少し濁っていることに気づく。

「あ…昨日の分の回復忘れてた」

若干顔を赤らめながら懐からまた何かを取り出す。それは黒い塊だった。

魔女の卵『グリーンシード』。魔女を倒すことで手に入り、これによって魔法少女達は魔力を回復できる。

グリーンシードをソウルジェムに当てると…そこからソウルジェムの濁りが吸い込まれていく。

程なくして、ソウルジェムは輝きを完全に取り戻した。

「皆さんは、私の初めての友達です。だから、もし魔女に襲われても…必ず守りますから！」

語るつきよはいつもと雰囲気が違う。先日までのような少しおどおどとした感じではなく、自信に溢れていた。

魔法少女としての自分を誇りに思っているのだ。

なのは達は、その話を黙って聞いていた。

普段使われないような言葉が出てきても、質問の一つさえしなかった。

しかし、五人とも…心の中では打ちひしがれていたのだ。

全員、同じ理由で。

彼女達五人は、つきよに出会う前から、魔法少女についてを全て知っていた。

そう、『全て』…

…魔法少女の、裏の真実さえも。

キュウベえとの契約…それは、『少女の魂を器に入れること』である。

魂の器…それこそが『ソウルジェム』なのだ。

残された少女の体はいわば抜け殻。彼女達は、ゾンビのようなものにされているのだ。

そして、ソウルジェムは濁る。魔力を使うだけでなく、心に絶望が生まれた時にも。

その宝石が完全に濁りきり、漆黒に染まった時…

ソウルジェムはグリーンフィードとなり、魔法少女は…魔女となる。

願いをかなえたことによる『希望』の宝石が、『絶望』により黒く染まって生まれたのが魔女。

すなわち、全ての魔女は魔法少女が絶望した成れの果てであり、全ての魔法少女は魔女になりうるのだ。

魔女になる運命の魔法少女を生み出している、キュウベえこと『インキュベーター』。

その目的は、宇宙の寿命を延ばすためにエネルギーを確保すること。希望が絶望へと相転移する瞬間には、大きなエネルギーが発生するという。

彼らは少女の魂をソウルジェムに閉じ込めることで絶望エネルギーの回収を成している。

いわば魔法少女達は、インキュベーターの家畜のようなものなのだ。

時空管理局に協力したミッドチルダ式魔導師、高町なのは。

彼女が最初に手にした魔法の力は、『魔導師』としての力ではなく『魔法少女』としての力。

しかしジュエルシード事件の時、フェイトとの出会い等を通して時空管理局に関わることができたおかげで、魔法少女の運命から解放され、ミッド式魔導師となったのだ。

そしてフェイトも、魔導師となったのはとの最後の戦いの後：敗北とその先にある運命に絶望していた心の隙を突かれ、ある願いによって『魔法少女』となった。

この時の願いによってジュエルシード事件は大きく展開。新たなる魔法少女も出現し：なのは達は、彼女が魔女となる瞬間を見る。

目の前で魔女となった少女は、なのは達の手で葬られたのだ。

「魔法少女にインキュベーター：僕としたことがすっかり失念していた。くそっ！」

マンションの一室、フェイト達の部屋。中学生くらいの少年が深刻そうに拳を叩きつける。

彼の名はクロノ・ハラウン。時空管理局執務官にして、フェイトの義兄である。

「まあ：仕方ないのかもね。あの時以来全然出ない上に、闇の書事件まであったから…」

エメラルドグリーンのポニーテールが特徴的な女性が答える。クロノの母、リンディ・ハラウンだ。

彼女は時空管理局提督であり、ジュエルシード事件や闇の書事件において活躍。

闇の書事件の後、天涯孤独となっていたフェイトを養子にとったのも彼女である。

リンディの言う通り、ジュエルシード事件の時に地球に作られたインキュベーター対策団体は、魔法少女の確認の難しさもあいまって

同事件以来成果を上げておらず、更に闇の書事件関係で調査に割く時間や人手も殆ど無くなってしまうていた。

「何とかならないんですかっ！このままじゃ…つきよが…っ！！」
叫ぶアリサの瞳には涙が浮かんでいた。

はやてやアリサ達には、魔法少女とは関係が無い。しかし闇の書事件の後、三人には管理局等の事の他に、魔法少女の事についても一通り聞いていた。

「…申し訳ないが、今は何も行動できない」
瞳を閉じ、つぶやくクロノ。

「そんなんっ！？」

時に非情とも取れる判断をする彼らでも、本当は別の行動を取りたかったのだろう。この事を知っているなのは達、彼らのことも聞いていたはやて達も、驚き以上の言葉は出せなかった。

「ジュエルシード事件の時、インキュベーターになのは達の顔が割れている。話を聞く限りだと、つきよは奴を信じきっているようだから、ここで下手に何かしてしまえば、彼女に敵視されることになるかもしれない。そうなれば…ほぼ確実に、彼女を助けることは不可能となる。だから…今は様子を見るしかないんだ」

「…それが賢明だよ、管理局のみんな」

「！？」

突然響いた声。

なのは達には聞き覚えのあった、あの声だ。

「インキュベーター…っ！！」

そして、声の主が姿を現す。

猫のような小動物であり、紅く瞼のない瞳に、腹の紅い模様が。耳がらたれた長い毛。

「なのはに…フェイトだっけ。久しぶりだね」

「キュウベえ…、一体何をしに来たの！？」

明らかに敵意を伴った、なのは達の視線。

それはそうだろう。彼女達が契約する際、魔法少女の裏の側面…『知られたくないこと』は一切言われなかったのだから。

「君達に下手な行動を起こさないようにしてもらいただけさ。つきよにはまだ死んでほしくないんだ。最近、海鳴にも魔女が出てくるようになってる。君達に任せると、グリーンシードの回収がでないからね」

インキュベーターの言うことは正論だ。彼らはグリーンシードを回収することで、母星にエネルギーを供給している。

「安心してくれ、つきよにはなのは達のことはまだ言わない。君達には、今はまだ友達でいてほしいからね。まあ管理局のことはもう話したけど」

「…っ!？」

彼の言葉で、可能性でしかなかったクロノの最悪の予測が現実味を帯びた。

これでもう下手な接触は封じられたこととなる。

「やっぱり、あなたは…つきよちゃんをっ!!」

「当然じゃないか。そもそも魔女になつてくれなきゃ意味がないからね」

そういつて消えるインキュベーター。

…彼らのほとんどには感情が存在せず、論理的な思考のみしかできないため、説得はほぼ通じない。

更にいくら殺しても何度でも生き返るため、処理もほぼ不可能なのだ。

後に残されたのは、呆然とする少女達だけだった。

「クロノの言った通り、本当に打つ手が限られてしまったわ…」

最初に口を開いたのはリンディだった。

インキュベーターは狡猾だ。下手に策に出ても、すぐに対策あるいは利用されてしまう。

「つきよ…あいつに踊らされているだけだってことを、なんとかして伝えられたら…」

アリサが不意に零した言葉。

しかし、なのはは逆転の一手をそこに見出していた。

「それだっ…！」

「…！？」

「わたしたちがつきよちゃんともっと仲良くなって…管理局とかキユウベえのことを言っても、信じてもらえるようになればいい！」
これまで、戦いを重ねることで友情を育んできたなのは。

彼女はつきよと戦う可能性も考えていた…のかは分からない。

しかし、現状ではかなり望ましい選択と言えるだろう。

「そうか…。奴らは感情についての理解が乏しい。これなら…！」

「…皆さんは今までどおり彼女に接するということね。分かったわ。ただし…しばらくは魔女が出たら彼女に任せるように」

「…はい！」

こうして場は解散となり、少女たちは帰路に着いた。これからのことを考えながら…。

「やっぱり、あの時の子が…」

ただ一人、はやてだけは少し前のとある出来事を思い出していた。

#5「疾風」(前書き)

はやて回ってここだけだったり。

それにしても、大学は始まるわ、アイデアは浮かばないわで早くも挫折しそう・・・

頑張れ、僕。

投稿ペースは落ちるかもですが、絶対に書ききってみせる

#5 「疾風」

#5 「疾風」

一年ほど前のことだった。

病氣を持っているために通院を余儀なくされていた少女、八神はやて。

彼女には両親がいない。それゆえ幼い頃から家族のぬくもりを失っている。

しかも病氣のため学校にも行っていないため、友達もいない孤独な生活をしていた。

はやては十歳に満たない子供でありながらこうして一人で暮らしてたのだが、生きるための資金は親の友人が何とかしてくれていたために何とかなっていた。けれど料理や買い物は一人でこなしていたのである。

（闇の書事件の時に、資金をくれていた『親の友人』の正体を知ることになる）

はやては、かかりつけの女医以外には一切他人とのかかわりを持っていなかったため、いつも寂しい思いをしていた。

「（せめて一人でも、仲の良い友達がほしい…。）」

切っ掛けがある度にこのようなことを考えていたが、所詮病弱な身。自分で動くこともほとんどできず、車椅子での移動がやっとなのだ。

友達作りは、半ば諦めていた。

そんなある日の夜。来訪者は訪れた。

「はやて、はやて…」

自分を呼ぶ声。

「(…?何やるこの声…。夢?)」

きつと友達がほしいという想いが夢に出ているのだろう、と思った
はやてはそのまま再び眠りにつこうとした。

「はやて、はやて…」

またもや聞こえる声。

「(おかしいなあ、まだ聞こえる。でもどこから聞こえてくるのか
分からへんし…やつは夢か)」

そう。この声は耳からは聞こえていなかった。

頭の中に直接語りかけてくるようなイメージ。所謂テレパシーのよ
うな声だった。

「はやて、はやて…」

「う、うゝん…」

さすがにしつこいと感じたのか、目を覚ましたはやて。
ぼんやりと見えたものは、白い影だった。

「(にゃんこ…?ということは、この子が呼んだんとちゃうか?…
まさか)」

その影は、しかしよく見ると猫とは違っていた。

耳から長い毛が房のようにのびている上に、その目は赤く、ガラス
球のように丸い。

どの生き物とも一致しないファンシーな姿。
しかも、

「やつと起きたね、八神はやて」

突然言葉を発した。

「うわっ！？しゃべった…、あの…あなたは何や？」

「僕の名前はキュウベえ。君にお願いがあつて来たんだ」

「お願い？」

「僕と契約して、魔法少女になつてほしい」

「魔法…少女…」

突然このようなことを言われて戸惑うはやてだが、内心わくわくしていたのも事実だ。

彼女は昔、魔法少女ものの子供向けアニメを見たことがある。こういった作品には、多くの場合魔法少女のパートナー…アニメのマスコットとして不思議で可愛い動物が登場するものだ。目の前に居るキュウベえは、まさにそのマスコットを思わせる雰囲気だった。

その彼が今、魔法少女にならないかと誘っている。つまり、自分はいから…

「わたしが、その魔法少女になるんかあ…。楽しそう！」

と一瞬素直に喜んだはやてだが、すぐに魔法少女もののセオリーを思い出す。

「あ、でもそうなたら何かと戦わなあかんのか？」

「よく分かったね。魔法少女になつた者には、『魔女』と戦う使命を課せられるんだ。でもその代わり、魔法少女として契約した時に…君の願いを叶えてあげられるよ」

「願いをかなえる…？じゃあ、わたしの足も治るんか？」

「足が悪いのかい？その程度なら造作もないさ。君ほどの素質がなくても可能くらいだ」

「…！」

はやては一瞬、呆然とした。

自分の抱えている障害が重いものだということは昔から知っている。簡単には治らないものだという事もだ。

それが今、治るチャンスが与えられたことになる。

しかし彼女にはもう一つ願いがあった。『友達がほしい』である。

「でも願い事って、一つだけやる？」

「まあね。…友達でも欲しいのかな？」

「（ぎくっ）」

はやては少し悩んだ…が、答えを出すのは早かった。

「そっちは、ええや。足が治ったら自分で歩いて探します」

「ということは、君の願いは『足を治すこと』でいいかな？」

「…お願いな」

はやての返事を聞き、キュウベえは耳から生えた毛をはやてへと伸ばす。契約の儀式だ。

彼女に与えられた、希望という餌。これは幼いはやてにはあまりにも魅力的なものに感じていた。

この誘惑に乗ってしまうことが、近いうちに絶望をもたらすことなど露も思わずにである。

そして少女は、何も知らぬまま地獄へと身を墮とす…

はずだった。

（バチッ！！）

「…！？」

突然の放電のような音とともに、キュウベえの毛が、灼熱の炎にでも触れたかのように引っ込んだ。

「ど、どないした！？」

「拒絶反応…。これは大物のロストログアか何かか…？だとするとこの子の素質は…」

なにやらぶつぶつと呟くキュウベえ。しばらくしてはやてに向き直る。

「…残念だが、君とは契約できそうにない」

「えー」

「君ほどの素質の子を野放しにしておくのは実にもったいないが、君は魔法少女にはなれない体質のようだ」

残念に思うはやてだったが、すぐに考え直す。

魔女との戦いは厳しいかもしれない上、そもそもこんな都合のいい奇跡がそう簡単に転がってくる筈がないのだ。

「…わかった。今の事は夢つてことにしとくな」

「それをお願いするよ。じゃあね」

キュウベえはそう言うのと、どこへともなく去っていく。

「（結局なんやったんやろ…あの子…）」

「主はやてに、そんなことが…」

「う、うん。ついさっきまで忘れとったけどな。ああして会って、また見たから思い出したんや」

そして時刻は戻る。インキュベーターの話を聞いたはやてが、今日聞いたことと自分の回想を打ち明けたところだ。。

仕事を終えて帰ってきていたヴォルケンリッターの四人がその話を聞き、その後最初にこうして口を開いたのが、ヴォルケンリッターの将・シグナムである。

「けどどないして契約できなかったんやろ？」

「…強力なロストログアの多くには、インキュベーターに対する抗体のようなものが備わっていると聞きます。闇の書：夜天の魔道書にも、そういった機能があったのではないでしょうか」

続いてシャルモ口を開く。

「そういえば、なのはちゃん達もそう言うてたな」

はやても闇の書事件の後に、なのは達からインキュベーターの存在について聞いていたが、初対面の時の印象とかけ離れていたもので、いまいち思い出せないでいたのだ。

「でもよ、もしその機能が無くて、そのまま契約していたら…」

ヴィータが思ったことを何気なく口にしたが、最後まで言う前に黙り込んでしまった。

勘のいいヴィータのこの様子を見て、他の四人も押し黙る。

…はやてが闇の書に飲み込まれた時の事を、思い出してしまった。

彼女は昔から闇の書に身体を侵食されていたが、それは闇の書が完成すれば止まる筈だった。

だからヴォルケンリッター達はその完成を急いでいた。

もちろん、はやてには知らせずにである。闇の書の完成には他人の魔力を奪う必要があるため、はやてはそれを良しとしていなかったのだ。

騎士たちが闇の書の完成を目指して活動していたことは、実は、はやても薄々気付いていたが…突然そのすべてが無駄だという事を、ある者から告げられた。

残念ながら、彼らの策略によりその時既に闇の書は完成していたため、覚醒には彼女の意思がトリガーとなっていた。

絶望の宣告を受けたはやては、闇の書の真の主として覚醒を遂げ、闇の書の意味の中に封印されてしまったのだった。

（すぐになのは達に救出されることになったが）

「（悲しみとかそういうんがわたしの中で爆発して…何にも分かんなくなっとなっつけ…）」

あの時の、まさに『絶望に吞まれる』感覚。

それは、いつかなのは達から聞いた魔法少女の真実——魔法少女が絶望し、魔女となること。その時の感覚も、きっと…。

「…主はやて、過ぎたことを考えるのはやめましょう」

「あ」

我に返ったはやて。確かに今は無事である。魔法少女にならずに済んでいたのだから。

「リインが守ってくれてたんか…おおきに…」

こうしてようやく笑顔の戻った主を見て、騎士たちも安堵したようだ。

「よし、つきよちゃんのことさっき言った通りやから、みんなはいつも通りでええよ」

「はい！」

こうして、八神家に住む五人の日常が、再び戻ってくる。

つきよに真実を話すのは、もう少し後。

それまで、みんなで仲良くしていればいい。友達の言葉は、きっと信じてくれるから。

なのはだけでなく、少女達は最初から皆同じ思いだった。

だからこそ作戦の決定に誰も異を唱えなかったのだ。

この夜、少女達は少し先のこと…打ち明けるときの事を案じながら眠りについたのだった。

#6「葛藤」(前書き)

いつものように遅い更新ですね。

ちなみに、今のところ出てる魔女は全部オリジナルです。名前とか性質とか考えるのめんどくさいけど楽しい。

あ、そうそう。はやて回はもうないと思う

6 「葛藤」

6 「葛藤」

- Virginie -

水晶の魔女。その性質は潔癖。

ありとあらゆる汚れを憎んでおり、汚れたものを見るやいなや使い魔をけしかけるが、自身は何もしない。

この魔女を倒したくば、とにかく汚いものを用意して投げつけるべし。

「襲われてませんかっ!？」

「へ、平気だよ…つきよちゃんこそ、大丈夫？」

「大丈夫です、この程度」

隅のほうにかたまっているなのは達を尻目に、炎拳の魔法少女つきよが舞う。

両拳に炎を纏わせ、近づいてくる使い魔——箒や雑巾の姿をしていた——を片っ端から殴り倒していた。

どんどん落とされていく使い魔だが、魔女も次から次へと生み出していき、一向に数が減らない。

つきよは、防戦を強いられていた。

「（これじゃキリがない…）」

作戦決定から数日後。今日はなのは達とつきよは皆一緒に出かけていたのだが、運悪く魔女に出くわしたため、つきよ以外はこうして見守っている。

もしなのはとフェイトが加勢すれば、この状況も覆されるだろう。

しかし、状況はそれを許さないのだ。つきよの前で魔法を使ったら『魔導師』であることが露呈する可能性が高く、その上既に、つきよはインキュベーターから管理局が敵だと聞いている。

結局なのは達は、加勢しようにもできない状況なのだ。

そしてつきよは未だに使い魔の総数を減らせずにいる。いつの間にか、彼女の顔に疲れが見え隠れしてきた。

それに気づいたのか、敵の大部分が一斉につきよに群がる。

「…！」

ところが、意外にもつきよはこの状況をチャンスと受け取っていたのだ。

襲い掛かってきた使い魔達に鋭い回し蹴りを放ち、その多くを殲滅する。一気に大量の使い魔が消えた事により、一瞬ではあるが…敵の総数が減った。

「（今だっ…！）」

つきよはこれを見逃さない。右手にひととき大きな炎を宿すと、薄くなった敵陣に猛スピードで突っ込む。

「ヘブンリー・インパクトオオ！！」

そしてその勢いのまま、魔女に必殺のパンチを見舞った。

「ふう…、みんな無事でよかったです」

戦いは、つきよの勝利に終わった。

「つきよちゃんも大丈夫だよね？」

「当然です、それでもそれなりに戦ってますから」

満面の笑みで答える。なのは達はつきよの力量に内心驚いていたた

め、ベテランというのに嘘はないのだろうと思える。

いつもの雰囲気を取り戻し始めた少女達。調子を取り戻したアリサ（実は一緒に居た）は、浮かんだ疑問をストレートに口にする。

「ところで、『ヘブンリーインパクト』って何よ？」

正にストレート。他の全員が言うのを憚っていたのかもしれないが、真相は誰も知らないという。

「あ…っ、あれは…／＼／」

「も、もしかして聞いちゃまずかった…？」

「い、いえ。人前であれを言ったのは初めてでしたね…」

皆の予想に反してすぐに立ち直ったつきよは、呼吸を一回整えてから答える。

「あーほら、一応正義の魔法少女…ですから、必殺技なんかあった方が様になるじゃないですか？だからいつもはああして叫んでたんですけど…、あう、人に聞かれると恥ずかしい／＼」

顔を真っ赤にして答えた…その言葉にも、全く嘘が感じられない。つきよは、正直な子だった。

しかしそれ故に、なのは達全員がある恐怖を抱いていた。

そして、それはあまりにも早く現実となった。話題をそらすように…つきよは言ってしまう。

「と、ところで皆さん…『時空管理局』って知ってますか？」

「（…ッ…!）」

今はまだ聞きたくなかった事を聞き、少女達は、平静を装うのに精いっぱいだった。

「えーっと、時空管理局…てと？」

「確かキュウベえが、『魔法少女の敵』だって言っていました」

特に気にする様子もなく話を続ける。どうやら、心当たりがあることは気付かれなかったようだ。なのは達は、真実を知られることへの恐れよりも…友達に隠し事をしなければならぬ後ろめたさの方が勝っていた。

「理由は分からないけど、魔法少女を人間に戻したり、キュウベえ

の命を狙ったりしているみたいです。キュウベえは魔女からみんなを守るために魔法少女を育ててるのに……！」

「……………」
違う。奴はそんなに優しくはない。人間を家畜か何かとしか見ていない。

しかし管理局が『魔法少女を人間に戻したり、キュウベえの命を狙ったりしている』ことは、紛れもない事実。

インキュベーターは、絶対に嘘はつかない。しかし都合の悪い事実は口にしない。

ある魔法少女が真実を隠す訳を聞いたことがあるが、その理由は、『聞かれなかったから』である。

それはそうだろう。魔法少女にはつきよのように自分達を正義の味方か何かだと思っている子も多い。もちろん願いの代償として割り切っている子も多いが、それでも自分が利用されているだけだという事など疑いもしない。

魔法少女となる子には思春期が多く、インキュベーターはその時期特有の精神の不安定さにつけ込むように契約に持ちかけてくる。その上、そのような時期の少女は『契約』という言葉の恐さも知らないのだ。ましてそれよりも幼く純粋で、おまけに心に不安を抱えたつきよが、自分を助けてくれたインキュベーターの事を疑えるだろうか。

「時空管理局は『魔導師』っていう人たちを送って活動しているみたいで、最近その人たちに気付かれたって。いつ来るかもわからないみたいなんです……」

「……じゃあ、もし管理局の人と会ったら、つきよちゃんはどうするの？」

これはなのはとフェイトが、どうしても聞いておきたかったこと。場合によっては、つきよと戦わないといけないかもしれないから。もちろん、戦う覚悟はできてる。だけど、つきよなら話せば分かってくれるかもしれない。そうなってくれれば……

「私は…戦えます。でも、もし話し合いで解決できるなら…その方がいいに決まっています！」

…そうなってくれば、もう何も怖くない。

「そ、そうだよねっ」

つきよにはばれなかったが、やはり誰もが安堵していた。つきよはいい子なのだ。少なくとも話を聞かないような人間では決してない。彼女も、平和を望んでいたのだ。

「（ごめんねつきよちゃん…でも、信じてるからね…）」

こんなやりとりがあつてから、更に数日。

- F r a n z i s k a -

泥の魔女。その性質は怠惰。

努力する人間に対し、常に嘲笑を向け続ける。

彼女の餌食になる人間は、大抵が夢半ばで諦めかけた者。再起しようとする心に囁きかけ、結界へと誘い込む。

自らの存在に意義を感じたことがないが、本人はそのことを気にしていない。

魔女の暗い結界の中、変身したつきよが宿す炎がひとときわ輝き、舞い踊る。

だが、決して攻撃の快音は響かない。

「はあっ…はあっ…」

つきよの拳では決定打どころか有効打さえも与えられていない。珍しく、つきよが苦戦を強いられていた。

それもそのはず、今回の敵はスライム状の魔女。その特性ゆえ、あまり打撃が通じない。格闘メインのつきよとは相性が悪いといえる。

「つきよちゃんっ！もう逃げようよ…っ」

「私は逃げません！…というより、なのはさんこそ逃げてください！」

今日、こんなやり取りがもう何回も繰り返されていた。しかしなのはの声は届かない。つきよは戦いを続ける。

「私が逃げたら…一体誰がこの魔女をやっつけるんですかっ！？」

無理もなかった。現状この街には他に魔法少女がいないため、つきよは自分だけが魔女から人々を守る存在だと思っている。否、責任を感じていた。

もしかしたら、勝てないと分かっているかもしれない。しかし元々の正義感、そしてそれ以上に友達を守りたいという思いが逃げることを許さないのだ。

（つきよは知らないが、同じ町に魔法少女が複数居た場合はグリーンフシードの取り合いになることもしばしばある）

「でも…っ…！」

叫ぶなのはを尻目に、つきよは襲いかかる触手をかいくぐって魔女を殴りつける。だが、泥の体はパンチの衝撃をほとんど殺していた。仕返しとばかりに魔女が勢いよく泥を飛ばす。飛び退って避けたつきよは…ぬかるみにはまってしまった。

「うわっ…！そんな…」

気高き魔法少女の瞳に絶望の色が宿る。

「っ、つきよちゃんっ！？」

我慢できずに駆け寄るなのは。つきよはそれに気づくと、笑顔…明らかに作り笑いだとわかる顔、を浮かべて、

「大丈夫。それより早く逃げてください…（他のみんなはここには

いない、せめてなのはちゃんだけでも…！」

「…！！（まさか…ここで…！？）」

なのはつきよの意図を悟ってしまった。

魔女はつきよにとどめを刺そうと、泥の槍を生み出す。それでもつきよは動こうとしない。

「早くっ！逃げてえっ…！」

「（いやだ、そんなの…つきよちゃんがここで死ぬなんて、嫌だ…！）」

『（…自分の信じる道を、遠慮せず進んでください。マスター）』

「（レイジング…ハート…！）」

刹那の会話を経て、なのはから迷いが消えた。

「…ごめんね」

こう言うとなのはは、つきよの前に出て、襲ってくる泥の槍を見据える。対してつきよは意外な展開に驚いた。

「な、なのはさん！？」

「（こんなに早くばらしちゃうなんて思わなかったな…みんなも、ごめんね）」

無言でつきよの前に立ちはだかる。

「いや、逃げてくださいっ！」

「それはできないよ。つきよちゃん、ここで終わるつもりみたいだったし」

「そ、それは…！」

嘘のつけないつきよに対し、思わず笑みが漏れる。ただしなのはは当然死ぬ気など更々なかった。魔女に向き直り、槍を待ち構える。

「嫌ああああー………っっ…！！！」

…鋭い音。

魔女の攻撃は、なのはのシールドが全て受け止めていた。

「…なのは…さん？それは、一体…」

『いきます、マスター。バリアジャケット・セットアップ』

「…レイジングハート、セーット・ア—ーッブ—!!」

「…!!?!?!」

変身したなのはを、顔色を変えて見つめるつきよ。なのはは振り向かず、目の前の魔女にレイジングハートを向ける。

『デイベイン・バスター』

「いっけええええ——————!!!!!!」

桜色の奔流が、魔女を飲み込んだ。

勝負は一瞬でついた。

一撃で倒れた魔女。それに伴い、結界もその姿を消した。

「…」

つきよは呆然としていた。目の前の少女が、先ほどまでのなのはとは別人に見えていた。そして、彼女の頭にはとある結論も出てくる。なのはは自分を助けてくれた。だからこそ、自分の出した結論を信じたくなかった。

「今まで黙ってて、ごめんね」

向き直り、つきよをしっかり見て話す。今話すべきことは、もう全部話してしまわなければいけない。

「わたし、高町なのは。時空管理局の魔導師なの」

#7「躊躇」(前書き)

書く事ない。

ところで、もしかして気づいてるかもしれませんが…

つきよのキャラは、まどマギの魔法少女達のほぼ全員の集合体のよ
うな感じですね。意図した事ですがね。

とりあえずPSPで新しい設定が出て、最悪スルーということでは

#7「躊躇」

#7「躊躇」

「…というわけなんです」

「なるほどね…。流石に死んじゃうよりはずっとよかったけどね」

同日の夜。リンディ達は出払っているため、フェイト宅に来ていたエイミイ（リンディの補佐）に報告しておいた。

この場に居るのはなのは、フェイト、エイミイ、フェイトの使い魔のアルフだけである。

「早速リンディ艦長に報告を…とその前に、つきよちゃんの人柄についてもう少し詳しく話してくれる？」

二人の少女が話し始める。彼女と出会ってから十数日の間、起きたことや感じたこと。

誰とでも友達になれるのはと、友達ができて間もないフェイト。それぞれほんの少し違うイメージを抱いていたが、決して大きく食い違っていることは無かった。そして二人とも、最初に話しかけたアリサがこの場に居ないことを少々残念にも思っていた。

「…大人しく引っ込み思案。昔は自尊心に欠けていたけど、魔法少女になってから自身を誇りに思うようになり、正義感も持ち合わせている…か。私は、正直…ポルト式魔導師には一番なっちゃいけないタイプだと思うんだ」

「え…？」

フェイトとアルフが少し驚くが、なのはは表情を変えない。ジューエルシード事件の時に、何人か魔法少女を見ていたからだ。

ちなみにポルト式というのは、インキュベーターとの契約によって行使できる魔法の事で、主に管理局やミッドチルダなどで使われる呼び名である。

「ほら、その子って”魔法少女”というのに対して、憧れ…みたいなのを抱いてるんだよね？でも実際にはあんな感じ。それを知った時…やっぱりそういう子ほど絶望しやすいと思う」

魔法少女は絶望した時、魔女となって呪いを振りまく。裏を返せば、全ての魔女は魔法少女のなれの果て。

幼い少女が憧れる、テレビの中の魔法少女像。信じていたそれに裏切られた苦しみは、彼女たちには重すぎるのだ。

「後、これは艦長から聞いた話なんだけど…長く生き残る魔法少女ってさ、魔女からグリーンフシードを集めることを生き残る手段だと割り切れる子なんだって。そのためには使い魔を放置して成長するまで待つなんてことも厭わないような…」

「ちよつと待つてよ！使い魔が成長するってどういうことだい！」

「ああ、アルフもフェイトちゃんも知らなかったっけ…。魔女の使い魔も人を襲い、命を喰らう。たくさんの人間を狩った使い魔は、成長して親と同じ魔女になる。当然グリーンフシードも孕むよ」

「だから、使い魔に人を襲わせて…グリーンフシードを持つ魔女に成長させてからやつつけて、確実に得るものを得る…」

「そう。それができる人ほどグリーンフシードのストックが多いから、長く生きられる。逆に、正義感が強いとこんな集め方はできないはず。聞いた限りだと、つきよちゃんには無理だと思うよ」

「そんな…」

これが、魔法少女の現実。

幼い少女の憧れる魔法少女像と、そのマスコットキャラのような外見で彼女たちに契約を持ちかける。そしてそれに誘われるような純粹な少女ほど、この世界では脱落しやすい。それこそがインキュベ

「ターの狙いであり、そもそも魔法少女の魔女化が目的である彼らにとっては、少女には絶望してもらわなければ困るのだ。」

「…とりあえず、報告しとくね」

エイミイの一言でも、重苦しい雰囲気が和らがない。

「つきよちゃん…、わたしたちのこと、疑っちゃうよね…」

弱音を吐くなのは。いつもの彼女からはかけ離れた様子に、エイミイも慌てる。

「だ、大丈夫だと思うよ？だって、友達なんでしょ？」
「…！」

友達。

つきよは、友達なのだ。

「（…友達だから、いつかきつと信じてくれる…）」

次の日。

「つきよちゃん、おはよう」

「…おはよう、ございます…」

「…」

会話がちつとも弾まない。

授業中ふとつきよの方を見ると、目をそらす。

ここ最近なのは達と一緒に昼食を食べていたが、今日は一人だった。

「（やっぱり。つきよちゃん、わたしたちのこと避けてる…）」
なのはは昼休み、途方に暮れていた。

「なのはちゃん…」

心配なのか、アリサとすずかが話しかけてきた。

彼女たちには昨日の事は話してあるため、なのはの悩みを知っている。

「つきよとはまだ話してないの？」

「うん、朝のあいさつだけなの」

「そんなのっ…」

言いかけて、アリサは思いとどまる。

少なくともつきよは管理局を敵だと思っている。それを知りながら、正体を知られざるを得なかったなのはの気持ちを察したのだ。
なのはには、つきよに話しかけることは辛いだろう。

「（…じゃあ、あたしがやるべき事は？）」

少しの沈黙ののち、アリサが口を開いた。

「全くなのはらしくもない。いいわ、このあたしに任せなさい！」

「ふえ！？」

自信たつぷりに胸を張るアリサを見て、なのはとすずかは戸惑う。

アリサは、なのはの悩みをさも簡単なことのように言うのだ。しかし…

「（アリサちゃんなら、もしかして…）」

席へと戻るアリサ。

なのはには、その背中がとても大きく、頼もしく映っていた。

放課後。生徒たちの帰る時間だ。

家族の待つ家に帰ろうとするその流れに、アリサは真っ向から逆らっていた。

「（お、いたいた。それにしてもありがちなシチュエーションね…）」

「アリサが真っ先に向かった場所…屋上で、つきよはぼんやりしていた。」

「おーいつきよー、何しみたれてんのー！」

「…何でもないです」

隣に立つアリサだったが、つきよは振り向かない。ただただ幽霊のような雰囲気ですべてを眺めていた。

「何でもない？その雰囲気はウソをついている雰囲気ね」

「…アリサさんには、関係ありません」

「ちょ、関係ないって何よ！？」

「…」

一向に話を聞こうとしないつきよ。

「…どーせ、なのはが管理局の魔導師って分かってショックだったんでしょ？」

「…！？」

この時、初めてつきよが振り向いた。

実際は正式に局に所属している訳ではないが、つきよにとっては同じだろう。

「知ってたんですか…？」

「最近、協力者だつて聞いたただけだね。ちなみにフェイトも、はやての家族も管理局に協力してる魔導師」

つきよは口をぽかんと開けた。

彼女にしてみれば、最初は友達であり守る対象だったのは。それが実は、自分よりよほど強い魔法使い。しかも立場的には自分の敵なのだ。おまけにアリサの言う事が正しければ、フェイトもなのと同じ。

つきよのイメージでは、管理局の魔導師というとスーツに身を包ん

だ大人だったため、こんなことは全く予想できていなかった。
友達の何人かが管理局の人間。ということは…

「…アリサさんは？」

「あたし？違うわよ！協力者でも魔導師でもないっての」
思わず息をつく。

しかし、心のどこかでは…ホツとしてしまう自分に気がつく。

「…つきよ、あたしたちって友達でしょ？」

「はい…」

決まってる。初めてまともに話した相手なのだ。

つきよがこう思う事を予想してか、アリサは迫る。

「じゃあ…なのはもフェイトも友達じゃない」

「…！」

分かっていたはずだった。

いや、分かっているはずだった。

例え管理局でも、なのは達は友達だ。大体、あの時…泥の魔女から
守ってくれたじゃないか。何故意識できていなかったんだろう。

謝らなきゃ。でも…

つきよの心の変化を知ってか知らずか、アリサが更に畳みかける。

「結局、気まずくて話しかけられないだけじゃないの？」

この一言で、何かが背筋を走り抜けた。

見透かされている。

自分でも気付いていないことを、第三者であるアリサの目はしっかりと
捉えていた。

「言つとくけど、なのはだって気まずい。だからまともに話せない
んだと思う。なら、意地張ってないでこっちから話しかけたって
いいんじゃない？」

「…でも、あの子がそれを知ったらどうなるって思うと…」

「なるほどね…」

魔法少女ということがばれた際、つきよは簡単に自身の境遇を語っていたが、その時の口ぶりだとつきよはキウベえの事を信賴しているみたいだ。だからこそ、魔法少女と敵対しているらしい管理局の人との接し方が分からないのだ。

「…とりあえず、まずは仲直りでしょ。それから目的でも何でも聞けばいいと思う」

「…」

こんな感じで話し込むこと、なんと数時間。いつの間にか空は赤くなっている。

「落ち着いた？」

「はい…」

夕焼けは人を振りかえらせるという。既につきよの意地は時の流れによつて融かされ、夕日の光の中でこれまでの事を思い返す余裕があった。そして、同じく夕日を浴びているアリサ。天涯孤独だったつきよにとつて、今のアリサの印象は…母親にも通じるものがあった。

そもそも、この学校に来て初めてまともに話せたのが彼女なのだ。勿論なのは達も友達だが、その中でも特に大切なのがアリサだった。そのアリサに、今こうやって説教され、慰められていたのである。

「まあ、一晩寝てから謝ってもいいと思うけどね」

いつの間にか座っていた二人。このままこうしていたいという思いが場を支配する。

しかし、暗くなっていく黄昏空と寒さを増していく空気は、二人の少女に帰れと言っているようだった。

「…そろそろ帰ろうよ」

「はい。あの…」

つきよが何かを言いたそうだという事が分かった時…アリサは、前

方から妙な体重をと温もりを感じた。

一瞬、時間が止まる。

「~~~~~っ!?!?!?」

「本当に、本当に…ありがとうございますっ!?!」

自分にかかった重さの正体…それに気付いた時には、つきよは既に手を放していた。

帰っていくつきよを見つめるアリサが、今度は冷静さを失っていた。
「な、なななな…っ!?!?!?!」

結局その日の夜、アリサは一睡もできなかったとか…

#8「友情」(前書き)

さーてアリサとのフラグは立った。と思う。文才ないけど。
全くつきよはお人よしだなあ。

冷静に考えると管理局仕事しなさ過ぎだなおいwww

8 「友情」

8 「友情」

「お、おはよう」

「おはようございます…」

次の日の朝。そこにあっただのは、昨日と大して変わらない雰囲気。

どうも会話がはずみそうもない、気まずい感じ。

だが、今日はこの暗い雰囲気も長くは続かない。

「な、なのはさん」

つきよが、会話を繋げるべく口を開く。

「…あの時は、助けてくれてありがとうがとうございましたっ！」

「ふえ！？」

度肝を抜かれるなのは。彼女にしてみれば、”あの時”から後の初めての意味のある会話がまさかお礼だとは思わなかったのだ。

「それと…、昨日はごめんなさい。どうしても話しかけ辛くて…」

「あ、えーと…うん、わたしも躊躇っちゃっててごめんね」

続けて出てきた謝罪の言葉。つられるように、なのはも謝ってしまふ。いや、なのはの方も話しかけられなかったことを後悔しているのだから、謝ることは彼女にとって正しい判断であり、決しておかしい事ではないのだ。

それよりも、自分より人に話しかけるのが苦手な印象を受けるつきよに口火を切るチャンスを奪われてしまった事を疑問に思っていた。昨日つきよに何かあったのか？…そんなことを考えた矢先、昨日、

ある人物から聞いた言葉を思い出した。

――全くなのはらしくもない。いいわ、このあたしに任せなさい――

全てに納得がいつてしまった。

「（ふええ…アリサちゃんには敵わないな…）」

フェイトやアリサ達も会話に加わり、いつもの雰囲気に戻ってくる。

「フェイトさんも近接戦闘が得意なんですねー」

「あ、うん。バル…武器に頼ってるけどね」

「なのはちゃんはどうちかゆうと砲撃の方が得意やる？わたしは…

今は戦えへんし、そもそも一対一は多分苦手や」

「あーもう、あたしたちも一緒に戦ってみたいーっ！」

「ちょ、アリサちゃん！？わたしも？ねえ、わたしもなの！？！？」

…若干話題に問題がある気がするが、それは決して敵対勢力同士の会話ではなく、確かに友達同士の会話だった。

いつの間にか、その場にいた全員がこんなことを思い始めていた。

「（こんな日々が続いたらいいな…）」

そして、放課後。

今日ははやてとつきよ、そしてアリサが一緒だった。

…正確には、未だに車椅子での生活をしているためにはやてを迎えに来たヴォルケンリッターのシャルも一緒だが。

夕日が照らす中、穏やかな会話が繰り広げられる。

「…え、つきよちゃんは料理できないんですか？」

「はい、そういった事はどうも苦手で…」

「一人暮らしなのにそんなんはあかん、栄養が偏ってまう！ほなら

今度うち来てや、何か御馳走するで」

「じゃあ今度あたしにも料理教えてよ！」

こんな、他愛のない会話が続いていた。

しかし話題が尽きると、こんな話をすることになる。

「…そういえば、シャルさんも管理局で働いていらしているんだね」

ほんの少し、空気が重くなったような気がした。

「ええ、その…、やっぱり管理局員って好きになれないかしら？」

「そんなことはありません。確かにちよつと前まではそうだったかもしれないです。でもなのはさん達もシャルさんも優しいし、何だか今では、管理局が悪者だなんて思えません」

元々”たとえ管理局員でも友達は友達”という考え方をしていたつきよだが、初対面であるはずのシャルも優しい人だったからこそ今のような言葉が出たのだろう。

何だかんだで、つきよも結構なお人好しなのだ。

「あら？でもシグナムもヴィータもザフィーラも、つきよちゃんにとつてはちよつと怖いかもしれませんよ？」

「こらシャルっ！（ぺしっ）」

「あ、あはは…」

ここで空気は軽さを取り戻した…かのように見えた。

「…管理局は、どうしてキュウベえや魔法少女を狙っているんですか？」

一気に表情を変えるはやて達。

「（やっぱりその質問…）」

少しの沈黙。

「…我々管理局が魔法少女システムに介入する目的、ですね」

「はい。どうしても貴女たちは魔女を倒す邪魔をしているように感じて…」

何も知らない魔法少女からすれば、この反応は仕方ないことだろう。は yet とシャルは思念通話で相談を試みるが、

「（今言つてえんやろか…）」

「（…ここまで関わったんです。少しずつ、話していけば）」

「（あのー、申し訳ないんですが筒抜けです）」

どうやら思惑は外れたようだ。

「えっ!？」

普通の人間には聞こえない会話方法である思念通話。ミッドチルダやベルカ式の魔導師の間で使われる会話方法である以上安心していたのだが、魔法少女であるつきよにはばっちり聞こえてしまうようだ。

実はジュエルシード事件の際、魔法少女だったなのはとミッド式魔導師だったフエイトはきちんと念話が成功していたが、そのことをは yet もシャルも聞いていなかったたのである。

「（念話いいなー…、何話してたんだろ）」

もちろん、一般人であるアリサには聞こえていなかったが。

「今話せることだけでもいいんです、どうか教えてください!」

つきよの真剣な眼差しに、意を決してシャルが話す。

「…管理局による介入の目的は、魔法少女をインキュベーターから救済すること」

「救済って…それに、インキュベーターというのは?」

「実は…」

言いかけた矢先、”いつもの感覚”に襲われた。

「これは…魔女結界!」

近くにある。すぐ近くに潜んでいる魔女がいるのだ。

「ちよつと退治してきます!」

反応のあった方向に駆けつけるつきよだったが、

「なら私も行きます。攻撃は苦手ですが、力にはなれるはずです」
「あ、ありがとうございます」
「じゃああたしはなのは、はてはフェイトに連絡するよ!」
「うんっ!」

結局総力戦となってしまったようだった。

- Gabrielle -

橋の魔女。その性質は嫉妬。
失恋の絶望に支配された魔女。
カップルを見るだけでイラつき、落ち着いてもすぐに使い魔に煽られてしまう。
他人の恋を引き裂かずにはいられないが、独り身の人間は決して襲わない。

「くっ、近づけない!」
暗く不気味な魔女の結界で、黄金の光が舞う。フェイトだ。
「こっちの砲撃も防がれちゃうー!」
やや離れた位置では、なのはが文句を言っていた。
現在のはなのは、フェイト、つきよ、シャルの四人が魔女と交戦しているが、いまいち決定打を与えられていない。
緑色に光る使い魔が執拗に邪魔をするうえ、魔女自身も衝撃波のよ
うなものを放つために、近づくことすらままならないのだ。
「うああっ!」
つきよが飛ばされる。使い魔の体当たりを受けたのだ。すぐにシャルに回復してもらうが、不利な状況は変わらない。

「（この魔女、強い…！みんながいてくれなきゃ、とつくに負けたかな…）」

そう、今回の魔女はつきよが過去に相対したどの魔女よりも強い。一人で戦える相手では決してなかった。

「つきよちゃん大丈夫！？」

「な、なんとか！」

なのはとフェイトも、無防備となったつきよたちの所に来る。余裕はなさそうだった。

見かねたのか、シャマルが口を開いた。

「…つきよちゃん、あの使い魔を止められますか？」

「はい？」

「作戦があります」

シャマルが自信ありげに言う。彼女は戦闘に積極的に参加することは苦手だが、その分回復や補助などのサポート能力に秀でており、戦況の判断も得意である。

彼女の作戦はこうだった。まず、クロスレンジ（近接戦闘）が得意で防御力もそこそこあるつきよが使い魔の動きを止め、砲撃の得意なのはの攻撃により最低でも明確な隙を作り、瞬発力に優れたフェイトが止めをさす。

三人の少女は作戦の内容を理解すると、すぐさま動く。

「いきます、ジェミニブレイズッ！」

つきよの声とともに、彼女の両手に炎が灯る。使い魔はそれに気づいて突進してきた。ここまでは、さつきと同じ。

襲いかかる使い魔を、いなすのではなく…受け止める。時間を稼ぎ、隙を作るために。

「捕らえましたっ…！」

「おっけー、いくよレイジングハート！カートリッジロード！」

『了解です、ロード・カートリッジ』

つきよの合図になのはが応え、愛用のデバイスを構える。

なのはの指示を受けたレイジングハートは、魔法の杖らしからぬ機

械音を上げ、巨大な薬莢のようなものを吐き出す。

…闇の書事件当時、敵対していたヴォルケンリッターとの力の差を思い知らされたレイジングハートは、管理局に自らの強化を依頼していた。

古代ベルカ発祥の、魔力の詰まったカートリッジを消費することで瞬間的な攻撃力を得る『カートリッジシステム』の搭載。これを経て、『レイジングハート・エクセリオン』として進化を遂げたのである。

『デイベイン・バスター』

大威力砲撃は使用者への負担も大きく、撃てるチャンスは限られている。しかし今はつきよがしっかり使い魔を止めているため、なのはは砲撃に集中できていた。

「デイベイイイイーン、バスタアアアーーーーーッ！！」

桜色の光が、暗き魔女結界に満ちる。カートリッジシステムを使って発射されたバスターは、かつてのジュエルシード事件の時代とは比べ物にならないほどの威力を誇っている。

魔女も素早く反応して衝撃のバリアを張ったが、爆発的なエネルギーはいともたやすくバリアを押し流し、魔女を飲み込む。

「フェイトちゃんっ！」

「…大丈夫、準備はできてるよ」

『当然です』

チャンスを待っていたフェイトとそのデバイスのバルディッシュが応答し、魔女を向く。

鎌状のハーケンフォームとなったバルディッシュが薬莢を吐き出す。"彼"もまた、闇の書事件の時に自らを強化、カートリッジシステムを積んで『バルディッシュ・アサルト』として生まれ変わっていた。

『ハーケン・スラッシュ』

音声とともに、バルディッシュに黄金の刃が宿る。

「…いきます！」

飛び出すフェイト。スピードに秀でた彼女がしっかりと目標を捉えて突き進む様子は、さながら弾丸のようだった。フェイトが近づいてきた頃、魔女を飲み込む光が途絶えた。なのはが砲撃を終えたのだ。輝く鎌を振りかぶるフェイト。魔女は未だに死んでいなかったが、今は砲撃を受け切った直後。完全に無防備だ。

「やあぁっ！！」

光の刃が振り下ろされた。

魔女が最期の瞬間に見た、一人の魔導師。

その眼には、憎しみではなく、哀れみと慈愛の色があった…。

「一件落着だね」

「やっぱり魔導師の皆さん凄いです…、私あんまり役に立っていなかったような気が…」

「あの、私なんかそもそも指示だけで戦闘不参加でしたが」

戦闘が終わり、気の抜けた会話をする一同。このまま一日が終わろうとしていた…

しかし、運命はそれを許さない。

「ところで、さっき聞いた…管理局の目的について…」

それは、つきよにとっては友達と和解するための道しるべのようなものだったのだろう。なのは達もそれが分かっていた。だからこそ、もう黙秘するわけにはいかない。

でもこれを話してしまったら、つきよはどうなるか。最悪…

「え、えと…、それは、すごく言いにくいことなの…少しずつ話すね」

#9「疑惑」(前書き)

分かった。

文才がない、というより詩的表現が苦手なんだ。

伏線は気をつけてるつもりだし。

とりあえずそんなこと気にせず、

純粹に物語だけ楽しんでいただければと。

あ、まどか組の出演はもうちょっと待っててねー

#9「疑惑」

#9「疑惑」

次元空間のどこか。

そこには惑星は存在していない。にも関わらず、多くの船が出入りしていた。

そもそもこれは惑星ではなく、超巨大な宇宙ステーション。数多の次元世界から、様々な目的で多くの人が訪れてくる。

ここに来るような人物には、民間人、ましてや違法取引などを目的としたならず者などは殆どいない。その多くが政府の高官や高名な学者、管理局の職員等である。

ここは多くの次元世界の中心。時空管理局本局なのだ。

「どう？何かわかった？」

「駄目です、当該エリアにもそれらしい手掛かりが見つからず…」
本局のとある観測部屋にて、リンディやクロノ、彼らの部下達がせわしなく動いている。

「やっと予算が下りたのはいいのですが…、やはりそう簡単にはいきませんね」

クロノが声を上げる。彼はリンディの息子だったが、同時に彼女の部下でもある。公私混同はしない、それがクロノの主義だった。

「ええ、でも解決できるなら早いうちにしてしまわないといけないわ。なのはさんの友達も巻き込まれてしまっているみたいだし…」

「…つきよですね。彼女の素質は恐らく平均的。でも性格面で危険度が高い…本当は優先的に保護すべき人物ですから」

「しかし…奴に地球での管理局員の存在を知られている以上、手を出そうにも出せないのよね」

彼らが話している事の中には、今のなのはたちに関係していることを示唆する事項が含まれている。

「少なくとも、次元空間全域からしらみつぶしに探さなければいけない…っていう状況はさつさと脱出してしまいたいわ」

落ち着いた口調で話す彼らだったが、部下達の中にはその顔に焦りの色を感じたものも多い。

事実、彼らは焦っていた。

「（早く見つけなければいけないというのに……インキュベーターの本拠地を）」

つい最近まで管理局は闇の書事件の事後処理に人手と予算をある程度割かれていたが、これが終わった矢先に地球で魔法少女が発見されたことが上層部を刺激したのか、特別に『インキュベーター追跡』の予算が下り、組織が再構成された。

実はこれは並大抵のことでは起こらない異常事態。というのも、管理局は昔から魔法少女関連の捜査には比較的消極的だったからだ。

最大の要因は、手掛かりを得ることが極度に難しいことである。

インキュベーターはレーダーによるサーチが不可能、魔女も結界に身を隠しているため魔法少女以外にはほぼ探知できない。残る要素である魔法少女の魔法（管理局はポルト式魔法と呼ぶ）も、ある程度の性能を持つ観測装置が必要である上に、それを使っても魔法を行使している瞬間でないと決して反応しない。しかも魔法少女が

魔法を使う場所は大抵が魔女結界の中。そのため、現行の管理局の技術では全くとっていいほど把握できないのだ。

地球でのポルト式の存在が確認されたのも、ジュールシードが地球に流れ着いたこと、それによる次元震のためにアースラが地球に訪れたこと、そして現地の魔法少女が結界の外で魔法を行使していたこと、これらの偶然の重なりによる快挙だったのだ。

ちなみにその時結界外で魔法を使っていた魔法少女こそ、後にミッドチルダ式魔導師となった高町なのは本人である。

リンディがふと人の気配を感じた…すぐ後、扉が開き二人の人物が入ってくる。

「…定時報告します。成果は…無し」

「こつちも何も得られなかった、やっぱこんなことに興味のある奴なんていねーよな…」

勤務中のシグナムとヴィータだった。彼女たちは、なのはのように元魔法少女だった人物からの聞き込みを担当している。

魔法少女になるような大きな因果を背負った者には、良質なリンカーコアを持った者も多い。そうでなくともソウルジェムを体内に戻す手術を経ると副作用で高確率でリンカーコアが生成するため、管理局に保護された元魔法少女はその多くが管理局員となっている。

シグナム達はそのような人物からの聞き込みを行っていたのだ。

「そう…ごめんなさいね、望みの薄いことをやらせてしまって」

「いえ、お構いなく。これも償いですから」

彼女たちヴォルケンリッターは、闇の書事件の主犯格と言ってもいい存在だった。彼女たちはある時は使命から、あるときは誤解から人を襲い、そのたびにリンカーコアを奪い続け、闇の書を覚醒させてきた。かつて敵だったなのは達や最後の主であるはやてのおかげで罪を重ねる運命からは解放されたものの、代わりに彼女たちに宿ったものは…黒く深い自責の念だった。だからこそ、四人は償い

の為に管理局で働いているのだ。

「こちらも成果は期待できない。今最も希望があるのは…やっぱり、ユーノが担当しているところだね」

クロノが呟く。ユーノ・スクライアー——かつてなのはにデバイスを与え魔導師としての道を示した人物。彼もまた管理局で働いており、闇の書事件の際にも活躍した。

彼の担当する場所は、本局某所に存在する『無限書庫』。膨大な蔵書量を誇る管理局の書庫で、次元世界におけるあらゆる秘密がここにあるとさえ言われている。しかし、蔵書量があまりにも多すぎるために必要な情報を得ることは難しい。管理局がこの書庫を利用する際は、特別な組織を編成して年単位で調べることさえもあるという。

ユーノは非常に優秀な検索魔術の使い手であり、闇の書事件の際にはその特技を発揮し、局の職員を驚かせていた。なので今回も無限書庫の検索要因に抜擢されていたのだ。

「やはりそこしか…、夜天の魔導書についても書かれていたという無限書庫しかない…のか」

「でも、流石にこんな短期間では見つかりっこないわよね。闇の書事件の時も、もしかしたら運が良かっただけかも…」

その場に少しずつ悪い空気が漂い始める。ここに居る全員が、今すぐにもうなだれそうな顔つきさえしている。

あまりにも、成果が無さ過ぎるのだ。

「…いけないわ、気を落としちゃ。今は一刻も早く突き止めるために…やるべきことをやらないと」

つきよはただただ呆然と、手にしたソウルジェムを見つめている。

契約をしたときに得た、魔法少女たる証。つきよにとって最初は…否、今までずっと、それは正義の味方たる誇りの象徴だった。

その意味が、変わっていた。

「これが…私の魂…、この体は、ただの抜け殻…？」

「…魔法少女について今話せることは、とりあえずこれだけなの」
言いたくなかった悲しい事実。しかし、より重要で…危険度の高い内容はまだ伏せている。

今のつきよの反応で皆は予感していたのだ。…今話せば、最悪の結末が待っているかもしれないと。

「…嘘、ですよね？本当なら…私…、ゾンビみたいなものじゃないですか…」

「嘘なんかじゃあらへん。…本当は言いたくなかったんや、でも…」
嘘だと思いたかった。これが、管理局が魔法少女を欺くための嘘であつてほしかつた。いや、そうに決まつてる。そもそも管理局は魔法少女の敵じゃなかったか。それに…

「キュウベえは、そんなこと一言も…っ！」

つきよにとってインキュベーターは恩人だった。自分を変えてくれた、魔法の世界の使者。魔女から人々を守るために魔法少女を生んで、その報酬として願いさえ叶えてくれた…

魔法少女として戦ってきた日々の中で、つきよの中でキュウベえは大きな存在になっていたのだ。

「彼は嘘は決してつかないと聞きます。しかし、最低限の事しか話さないらしいですよ」

つきよはこれを聞いて、ある考えに至った。

「（嘘はつかない…というのが本当なら、聞けば答えてくれるはず）」

彼女はキュウベえを信じたいのだ。さもなければ、今まで信じていたものが崩れてしまうかもしれない。

最早、ここに居る面々の誰もがそれを分かっていた。しかし…もうこれ以上つきよを苦しめたくない。いたたまれなくなったアリサが

話しかける。

「つきよ、今はまだ言えないけど…魔法少女にはまだ秘密があるの。管理局が魔法少女を減らしたい理由がね」

注目を浴びたアリサは、つきよを見据えて話し続ける。

「…フェイトの家は管理局の出張所になってる。今からでも遅くはないから、そこに行きなさいよ。そうすれば…魔法少女を辞められるから」

つきよはこの時、管理局の…少なくとも、表向きの目的に初めて気付いた。

仮にこのことが本当なら、自分はキュウベえに騙されていることになる。しかもアリサが言うには、他にも都合の悪い秘密があるらしい。

アリサ達は、初めてできた友達だ。管理局のなのはだって自分を守ってくれた。しかも、今の彼女たちの真剣な眼差し。どこに嘘をついている要素があるうか。

でも…嫌だった。今まで信賴していたキュウベえと敵対するようになることが、たまらなく、嫌だった。

「…少し、考えさせてください。明日の放課後、フェイトさんの家に行きます」

これが、今つきよのできる精いっぱい答え。

「今晚ゆっくりキュウベえと話し合ってみます。それで駄目なら…、どうかよろしくお願いします」

つきよは、インキュベーターとの会話によって判断するつもりなのだ。

もしこれが管理局の嘘だったら、魔法少女として…はっきりと管理局に敵対する。なのは達と戦う事を覚悟で。

もし管理局が本当で、自分がキュウベえに騙されていたというならば、

その時は…決別する。

過去の自分に…キュウベえに頼っていた自分に別れを告げる。

なのは達には…つきよの瞳から、確固たるその意志が感じられた。そして、自分たちが彼女の為にやるべきことを感じたのだ。それは、つきよの判断を認めてあげること。

「…分かった。絶対、絶対来てねっ!!」

彼女たちは、つきよを信じていた。きっと、インキュベーターに別れを告げて…魔法少女を引退してくれると。

納得のいく答えを出し、『魔法少女』と決別してくれることを。

しかしこの時、アリサはインキュベーターとの初対面…フェイト宅での会話を思い出していた。そして、小さな疑念がわく。

「（…つきよは、キュウベえの…あの冷めた言い方、態度、考え方に…耐えられるの?）」

「キュウベえ、出てきてくださいっ!」
誰もいない家の中、つきよは虚空に叫ぶ。

「やれやれ、一体なんなんだい？随分『不機嫌』そうじゃないか」
叫びを聞き届けたのか、どこからともなく現れる白い影。

…魔法少女がキュウベえを呼べば、いつでも駆けつける。主に、ソウルジェムの穢れを吸ったグリーンフィードを処理するためだ。

しかし、今回つきよが呼んだ理由は、当然別にある。

「ソウルジェムが私の魂の入れ物って…本当ですか？」
恐る恐る尋ねる。

例えこれが本当だったとしても…納得のいく説明さえしてくれれば、つきよは満足だった。

しかし、キュウベえの答えは予想外のものだった。

「…それは、なのは達に聞いたことかい？」

「…！？」

向こうが知っている思っていなかった人物の名前を出され、呆氣にとられる。

「なぜ、なのはさん達のことを…」

「そりゃあ彼女たちが元魔法少女だからさ。管理局に契約を破棄されたけどね」

「えっ…」

続けざまに放たれた一言に、更に驚きを隠せなくなる。なのは達も、元魔法少女…？

でも、もしそうだとしたら納得がいく。魔法少女の真実を身をもって知っている彼女たちが、友達が魔法少女でいることを止めさせようとしているのは、本当に…私が心配だったからなんだ。

ということは…

「…全部、本当なんですね」

「ああ、そうさ。ソウルジェム…魂の宝石っていう意味だろう？」

全く悪びれずに説明するキュウベえ。

いつの間にか、つきよの目につつすらと涙が浮かんでいた。

「何で…何で全部知ってて黙ってたんですか…っ！？」

これは、つきよの心の叫びだった。

今の会話でキュウベえへの信頼にひびが入ったつきよ。この時のダメージは、つきよにとってはあまりにも大きかった。それでも、やっぱり…納得のいく説明をしてほしい。それだけだった。

すぐに、インキュベーターが口を開く。

彼にとって至極当然の口上。それでいて、多くの魔法少女たちを絶望へ落としてきた言葉。

「聞かれなかったからに決まっているじゃないか」

#10「絶望」(前書き)

ちよつと時間がかかってしまった。

何だかフエイトの出番が少ないですね。これを書いている最中に気づいた。

これは対策を考えなければ。

後、今回若干尺が長いです。

展開については何も言わないで。

#10「絶望」

#10「絶望」

「か弱い人間の体のままで戦えなんて言わないよ。だからこうして魂を固体化している」

「ソウルジェムさえ無事なら、例え頭や心臓をすりつぶされても体を再構築できるんだ」

「こういうことがもし都合の悪いことだというのなら、事前に聞いておくべきだったね」

「そもそも、どうして君たち人間は魂の在りかにこだわるんだい？わけがわからないよ」

「いつもと変わらない雰囲気为学校。もちろん、一般の生徒や教師たちにとっては、だが。」

魔法少女を知る者たちにとって、今日は特別な日になるはずだった。少女たちの闘いは、ここで勝利を迎えるはずだった。

しかし、そのサインがいつまでたっても現れない。

一時間目が始まって、
昼食の時間になっても、
授業が全部終わっても、

つきよは、学校には来なかった。

「…やっぱり、これじゃあだめなんだ」

放課後、アリサが口を開く。

「分かってたはずなのに…！あいつのム力つく言い方じゃあ、つきよが余計に傷つくって！」

「あ…！！」

なのは達の顔つきが少し変わり、沈黙が場を支配する。

何故気付かなかったのか。こんな空気が流れ始める。

少女達は結果を急ぐあまり、前が見えなくなっていた。

アリサは、誰よりもつきよのことを気にかけていた。だからこそ、誰よりも先に気付くことができたのだ。

…なのは達に魔法の事を聞いてから、彼女は劣等感を感じていた。なのは達が自分と別の世界に居ること、それが少し悔しかった。そう思っていた矢先に転校してきたのが、つきよ。

彼女に最初に話しかけたことは、アリサの素であり、彼女にとって当然のことだった。特に意識しての事などでは決してなかった。しかし…つきよはアリサ達に心を開き、友達となることができた。

この時、アリサに自信が生まれていた。魔法が使えなくても、自分は誰かの役に立てるのだと。つきよの正体を知った後でも、不思議と劣等感はなかった。

彼女はつきよに感謝していた。誰よりも、つきよを守りたいと思っていたのだ。

「早く探さなきゃ！」

アリサの叫びによつて、一同が我に返る。やるべきことを思い出したのだ。

「（そうだ、後悔している暇なんてない。手遅れになる前に、つきよちゃんを…助けなきゃ！）」

黄昏はその暗さを増していく。

「（アリサさん…なのはさん…、どこに、いるんですか…？）」「暗いというのに、登校していなかったつきよが歩いている。

小学生が学校から帰るような時間はとうに過ぎている。当然聖？の制服を着た人影は見当たらない。

それどころか、目的に心当たりさえもなかった。ただ漠然と歩きまわっていた。

それでも…逢わなければいけなかった。

なのは達に会つて、キュウベえと決別しなければいけなかった。

「（私は間違っていた。もっと早く、管理局…なのはさん達を信じておくべきだったんだ…！！）」

つきよの心を支配する、黒い海のように深い後悔。

彼女は昨晚のキュウベえとの会話で、一気に彼への信頼を失っていた。人間の価値観がキュウベえに通用しないことを悟ったのだ。

そして、管理局の少女たちはこれを最初から知っていた。それで、あんなに…。

こう思つた彼女は、真っ先に行動に出た。…家を飛び出したのだ。これは闇雲な行動だった。だけどつきよは信じていた。いつか、き

つと見つかると。

この時、つきよは確かに短慮だった。

もう少し冷静になっただけでいれば…家から出ずに、電話などで伝えれば、きつとすぐに会えていただろう。

しかし、もちろんこの行動だけでつきよを責めることは酷だろう。

彼女は…あまりにも、運が悪かった。

消えかかった夕焼け。かなり暗くなってきたが、既に街灯がつき始めていたため…前から来る人影に気づくことができた。

「（もしかして…!!）」

希望を抱き、かけよるつきよ。やっと見つかったのかと。

しかしよく見ると、人影の正体は知らない人だった。

「……」

中学生ほどの少女のようだ。ひどくやつれている風で、心なしかふらついているようにも見える。

…こういう人を放っておけないのが、つきよのいい所であり…危険なところでもあった。

「あのっ、大丈夫…ですか？」

つきよは声をかけ、肩を貸そうとする。

「……？」

虚ろな瞳で振り向く少女。つきよに目を奪われた少女は、思わず握っていた手を開いてしまった。

少女の手の中にあつたものが落ちる。…それは、つきよがよく知っている大きな宝石。透き通っているはずのそれはすっかり濁りきり、元の色が何なのか全く分からなくなっていた。

「（ソウルジェム！ということはこの人…。こんなに濁って、早く

浄化しないと！」

焦るつきよ。急いで懷からグリーンフシードを取り出し、少女のソウルジエムに当てる。みるみる穢れを吸っていくグリーンフシード。…しかし、ソウルジエムの濁りは全く収まることが無かった。

「え…っ？」

今まで無かった事態に戸惑う。

グリーンフシードが穢れを取れていない。これは今まで魔法少女生活を続けてきたつきよにとってはあまりにも想定外な事だった。

ソウルジエムの中に残る、渦巻く黒い濁り。このままでは…。

「（このままじゃ…一体、どうなるの？）」

つきよは知らなかった。今まで自身のソウルジエムが濁らないように気をつけてはいたが、濁り過ぎるとどうなるか…考えていなかったのだ。キュウベえも『濁らせなければいいんだから』としか言わなかった。

しかし…淀み切った宝石を目の当たりにして、つきよは考えてしまった。

「（ソウルジエムが濁りきると…魔法少女は、私たちはどうなるの？）」

つきよの戸惑いを感じたのか、生気の宿っていない、絶望に染まった目が、つきよを見る。

彼女は、かすれた声で呟いた。

「…にげ…て…」

刹那、黒い光が爆ぜ、激しい衝撃波がつきよを襲つ。

「な…っ！？」

禍々しい気が回り一面にあふれ出していく。

嫌な感じがする。しかし、目の前の少女が一体どうなっているのか、混乱の頂点に立っていたつきよには、分からなかった。

必死で衝撃波から身を守るつきよ。彼女は衝撃波の中心を見据え……

.....!

言葉を失った。

そこにあつたのは、確かに今まで目の前に居た少女のソウルジェム……否、グリーンフシードだった。

そして、今つきよの目の前に居るのは……

それは、確かに今まで敵視して、狩ってきた存在だった。

—
:
:
:
L

それは、確かに今まで目の前に居た存在だった。

「…ぢ…」

それは、確かに今まで魔法少女だった存在だった。

「いっやっ」

それは、恐らく……

「嫌、嫌ああ……」

まほうしゅうじよであるつきよが、これからなるそんざいだった。

「嫌あああああああああ ああああああああ
あああ————— つつ！……！！！」

!!!!

亀の魔女。その性質は諦観。

自らの孤独な運命に逆らえず、また耐えることもできなかった魔女。自分では決して動こうとしないが、彼女の結界に迷い込んでしまったものは、誰の意思も関係なく底なしの沼に沈んでいく。

「つきよっ、つきよーっ！っ！」

月明かりの下、とある少女の名を叫ぶ声。しかし、いくら叫んでも聞こえてくるのは自分の声のみ。

他のみんなは二人一組となって別の所を探している。自分もさつきまでなのはと一緒に居たが、分かれ道のために手分けして探すことになった。

夜道の中、非戦闘員一人だけ。確かに怖かった。変質者もだが、何より…魔女の存在が。しかし、そんなことを気にしていられる状況であるわけではない。

「（そもそも、なんで家に居なかったのよ！携帯もつながらないし…！）」

彼女の家に訪ねてから気付いた、つきよの失踪。

これはなのは達全員に焦りをもたらしていた。フェイト宅にいるエイミーやアルフも捜索に協力しているほどである。

とりわけ、アリサは先ほどから嫌な予感がしていた。”最悪の事態

”が、起こってしまったのではないかと…。

「（いや、そんなことあるわけない！）」

つきよのことだ、きつと居た堪れなくなってあたし達を探して、迷子にでもなったんだ。

そうでも思わなきゃ…壊れてしまいそうだった。

「…つきよっ！」

アリサは意外なところでつきよを見つけた。諦めたら帰ろうと思っていた場所…アリサの自宅の前である。

恐らく気を失っているのだろう、つきよはアリサが近寄っても横たわったまま起きない。

「（どうしたのよ…！強い魔女とでも戦ってたの？）」

揺さぶりをかけても一向に目を覚まさない。

「（何とかしないと…！でもどうやって？…とりあえず）」

何をすればいいのかわからないアリサが最初に思いついたこと。それは、友達や管理局の知り合い全員に状況報告のメールを送ること…正直、何故こうしたのかは分からなかった。只、勘がそう告げていただけだった。

この判断は、すぐに正解だと気づくことになる。

ぼんやりと開かれる、つきよの青い瞳。

しかし…転校初日に見た青く澄んだ泉は、心なしか淀んでいるように感じられる。

「…アリサ、さん…？」

「気がついたのね…魔女と戦ってたの？元気ないけど…」

心配そうにささやくアリサ。

数秒の沈黙ののち、つきよが口を開く。

「…アリサさんは、知ってたんですね？…魔女って、一体何なのか…」

「……！！！」

アリサは悟った。つきよが、魔法少女のたどる運命を知ってしまったことを。

「ちよつと、ソウルジェム見せてみなさいよっ！」

つきよのポケットから宝石を探し、手に取る。

…ソウルジェムは、絶望の闇に染まっていた。

「…っ！！早く浄化しないと！」

慌てるアリサだが、つきよは落ち着いて答える。いや、諦めきっていた。

「…ごめんなさい、さつき戦ってから…全然、グリーンフシードが効かないんです…」

「そんな…それじゃっ…！！！」

グリーンフシードが効かない。それは、魔法少女が絶望に吞まれかけていることを意味する。

自ら穢れを生み始めたソウルジェムは、グリーンフシードで浄化できなくなるのだ。今のつきよは、本人が絶望を乗り越えなければすぐにでも魔女となってしまう状態だった。

あつてはならなかった最悪の事態が、目と鼻の先に迫っている。…いつしか涙が浮かんでいた。

いや、自分まで絶望してたまるか！まだ間に合うはずなんだ！

「…諦めるなんて許さないからっ！！…肩貸すわ、だから立ちあがりなさいよ！」

自分を奮い立たせ、つきよを立たせる。

行先は当然、フェイトの家。あそこまでたどり着きさえすれば…つきよは、魔法少女の運命から解放されるのだ。

「…私、正義の味方…の、つもりでした…。悪い魔女から、みんなを…守る、魔法少女…」

歩きだしてからすぐに、つきよが口を開く。

アリサは丁度現状の報告を終えたところだった。それを待つて、つきよは話を切り出したのだ。

「…それが、本当は、こんなもの。魔法少女が魔女になって…、それを、やっつけるために…に、魔法少女が増える。笑っちゃいますよね…」

「つきよ…」

そこでアリサは初めて気付く。つきよもまた、涙を浮かべていることに。

…つきよは”魔法少女”に対して、夢を、希望を抱いていた。正義の味方。かつこいい、今までとは違う自分。きっと、何かがあつてそれが打ち砕かれたのだろう。

「（もしかして、魔法少女の最期を、目の当たりにしたのかも…）」
アリサがこのような結論に達したのも無理はない。

目を更に潤ませて、つきよは続ける。

「私つて、ほんと…バカですよ。こんなに、優しくしてくれる…
友達の言う事を…すぐには信じないで、管理局を…疑ってばっかりで」

「…つきよは悪くないわ。一応、キュウベえの方が付き合い長い
んでしょ？簡単に裏切れなんて無理よ」

アリサは、まるで自分に言い聞かせるかのように言う。この事が、自分達には今まで分かっていなかったのかもしれない。自分たちにとって、キュウベえは敵でしかないのだから。

しばらく歩いて…

「…あぐうつ!？」

つきよが突然苦しみだした。

「だ、大丈夫!？」

慌ててアリサがソウルジェムを確認するが、変わらず…いや、先ほど以上に暗かった。

「も、う…、限界、かなあ…」

「そんなんっ！まだ諦めないでよっ！！もうすぐ、もうすぐ助かるからあっ！！」

泣きながらつきよにとりつく。…こうしないと、自分まで絶望に飲まれてしまいそうだった。

「最後、まで…、うう、迷惑…ばかり…かけて、しまい…ました、ね…」

激しく痙攣し、うずくまる。ソウルジェムの闇が渦巻く。

「だから最後なんて言わないでよあっ！！」

…いつの間にか、アリサは力強く抱きついていた。

流石に耳元で叫ばれたからか、下を向いていたつきよがこちらを振り向く。苦しむ中に、どこか心配そうな表情で。

「…、逃げない…んですか？」

「逃げるわけじゃない！…最後まで、つきよの力になってやるんだからあ…っ！！」

「…！！」

「待ってて、今フェイトの家に電話するから…」

アリサは素早く携帯電話のキーを打つ。

打ち終わるより前に、つきよが口を開いた。

「…えへへ…、もっと…早く、信じて…、れば…」

携帯電話のコールが鳴り始める。入力を終えたアリサが見たものは、つきよの、悲しい…悲しすぎる微笑み。

「本当……に……もっと……早く……」

どこかで、何かが、弾ける。

「……つきよ、大丈夫っ、大丈夫だから……！絶対……諦め——

……アリサの叫びは、闇に吸いこまれていった。

- Magdalene -

ヤドリギの魔女。その性質は依存。

かつて夢見た幸せを追い、盲目的に人間を捕らえる。

何かを寄生させることによって使い魔を生かし、育て続けるという。宿主となった人間は生きて帰ることもあるようだが、その後どうなるのかは誰にもわからない。

#11「月夜」(前書き)

遅れて申し訳ない。

しかし最初に言ったとおり、本来は不定期更新です。

てなわけで、これからの中間テストラッシュ、

その後に控えているモンハン3Gにより

これからますます遅れる事になるかとOTL

#11「月夜」

#11「月夜」

…ヤドリギの魔女誕生から、ほんの少し時を遡る。

「え、それは本当!？」

本局のとある部屋にて、リンディの驚いた声が響く。

「はい、確かに記されています!これなら、奴らの本拠地に攻め入ることも…!」

リンディへの通信は、無限書庫で調査していたユーノからだった。

彼は調査を開始してからわずか数日で、早くも目的の資料を見つけたしていた。

インキュベーターの概要。

遙か昔、古代ベルカ式が栄えていた時点で既に宇宙全域に広まっていたこと。

失われた魔法大国『アルハザード』があつたといわれる時代での報告例。

ベルカ式、ミッド式魔法技術での契約解除手順。

そして…インキュベーターの本拠地。

大雑把な情報しか載っていなかったが、それでも…彼らの拠点についての情報が得られたことは大きい。

「こうしてはいられないわ。みんな、中央や地上本部に報告、並びに応援要請を！」

たちまち騒がしくなる観測部屋。

しかしその騒がしさが、一同に安堵と士気をもたらしていた。ようやく進展があった。後は本拠地を探し当て、情報を収集しつつ、可能ならば叩く。もう二度と、魔法少女を生まないように。

喧騒に包まれる中、一本の通信がリンディに来る。

「何かしら…、え、エイミィ？」

地球のフェイト宅にて、ひとりの魔法少女の監視にあたっている補佐のエイミィ。彼女からの報告は…

「…何ですって、つきよさんが…失踪!？」

「(一体、どこにいるの…?つきよちゃん、アリサちゃん…)」

月明かりの下、路地を走るなのは。

アリサからのメールを受け取った一同は、彼女の示した場所を中心につきよ達を探しまわっていた。

「(もしかして…いや、そんなことあるわけない…!)」

フェイトの家にかかってきた、アリサからの空電話。それが、少女達の焦りと不安を揺るぎないものにしていた。…最悪の結末の可能性が上がったのだ。

仮に魔女の結界に囚われているだけだとしても、なのは達には手出しができない。結界を開くことができないからだ。

半ば無理やり自分を奮い立てて走るなのはに、突如念話が届いた。

「(おいっ、あいつの携帯があったぞ!)」

「（ヴィータちゃん！…それで、どこに…？）」
走り回っているのはなのは他に、フェイト、アルフ、ヴィータの四人。

ヴィータからの報告を受け、直ちに集合する四人。そこで彼女たちは、アリサの開いたまま放置された携帯電話を見た。
しばらく黙りこむ四人。

「…この近くに、いるんだよね？」

アルフの問い。これにヴィータが答える。

「もしくは…魔女結界にでもいるとか…いや、まさかな…」
なのはとフェイトは何も言わない。

…言えなかった。考えたくなかったのだ。

異変は唐突に訪れる。

地面に落ちているアリサの携帯が、”爆発”した。

「これは…！」

魔女結界。なのはとフェイトにとっては、もうよく知っている世界。つきよとの日々…ジュエルシード事件の時の悲しい別れ…これらが、再び二人の少女の心を侵食する。

「これが、魔女結界…」

「くそっ…、何だよこの気持ち悪い空間は…！」

アルフとヴィータにとっては初めての世界だ。如何に強靱な精神を持つていようと、負の感情の権化である魔女結界においては…不快感の一つくらい感じて当然だろう。

「つきよちゃん…アリサちゃん…、この中にいるの…？」

眩くなのはの心が不安につぶされかけていることは、誰の目にも分

かる。

「なのは…」

励ますフェイトだったが、彼女とてアリサやつきよの友達だ。不安をこらえてなのはを支えているのだ。

…ジュエルシード事件の時に、妹…アリシアが目の前で魔女となり、彼女を失ったこと。

この経験が、フェイトになのはを励ますだけの精神力をもたらしていたのかもしれない。

不安を必死に…必死に抑えて、少女達は進む。

しかし運命という物は、幾ら否定したところで…いつかは向き合わねばならないもののなのだ。

魔女結界内…蔦にまみれた廊下を歩く四人。

今までになのは達が出会った魔女たちとは違い、結界に入ってから魔女との遭遇までかなり距離があった。

…彼女たちは知らないが、魔法少女の方から結界に攻め入るときは魔女まで時間がかかる傾向があり、逆に魔女から攻撃する時はすぐに魔女と遭遇する傾向があるという。

「言いくいんだけど、何だかあたし達を呼んでいる気がするんだよ…、この奥に居る魔女ってやつがさ」

このヴィータの呟きがきっかけになったのかもしれない。

「わたしも、そんな気がしてたの…」

「…私も。つきよ達は、助けを呼んでる」

「フェイト…」

少女達は、少しずつ…今まで目を背けていた最悪の可能性と、向き合い始めていた。

今進んでいる廊下を見て、不安が確信に変わりつつあったからだ。

廊下の壁に映し出される風景…それがまぎれもなく、学校、通学路、みんなの家…なのは達がつきよと遊んでいる風景だったのだ。

魔法少女の避けられぬ運命。自分達のすべきこと。…それをようやく見据え、覚悟を決めるなのは達。

それを待っていたかのように、使い魔が姿を現す。

「…！」

それは緑の触手だった。

地面から姿を現した植物の蔦のような触手…それが鎌首をもたげて襲いかかった。

「バルディッシュ！」

『いきます』

いち早く反応したフェイトにより触手は切り裂かれ、動かなくなる。…いや、既に四人とも戦闘の準備は整っていた。そのままでも戦えるアルフを除き、デバイスを構え、バリアジャケットを着けている。

「近い、よね」

フェイトの呟きが、少女達を引き締める。

「…助けて、やらないとな」

「当たり前じゃん…！」

「…待ってて、つきよ…」

「今、行くから…！」

「なんだよこれ…、なんだよこれ…っ！」

目の前にあるのは、巨大な塊。

無数の触手が纏まって、一つのコロニーを築いているのだ。

半球型の巨大なコロニー。その頂上に、十字架のようなものが見える。

…磔にされて、眠っている…アリサだった。

「…どうして、こんなにならなきゃいけないのかな…」

沈黙を経て、なのはが口を開く。

「つきよちゃんは、町の人たちや…友達を、一生懸命守ろうとしてたのに…！どうして…っ！！」

「なのは…」

「他の子たちだって…！みんな、こんなになるなんて思ってたはずなのに…」

なのはは、泣き崩れていた。

今更、というわけではないが、魔法少女の悲惨な運命を再認識したのだ。…まだ幼いなのはが、これを真剣に受け止めて落ち着いていられるだろうか。

かつて友達…フェイトを魔女として失いそうになった記憶も蘇り、なのはを苛む。

「…アリシアだって、苦しかったんだよね。やっと生き返れたのに、騙されて…」

自分に言い聞かせるように、フェイトもつぶやく。

ジュエルシード事件の時、フェイト自身の願いによって蘇生した彼女の姉、アリシア。

彼女もまた魔法少女となり、…すぐに魔女となった。フェイト自身として、アリシアが残したグリーフシードが無ければ魔女化するところだったのだ。

「…なのは、フェイト！ボーっとするな、囲まれたぞ！」

「えっ…！？」

気付けば、周りを触手が蠢いている。

…魔女となった少女は、決して正気に戻ることが無い。戦って、絶望の運命から解き放つしか、彼女を救う手立てはないのだ。

「ずっと分かってたはずなのに、やっぱり悲しいよ…」

「でも、やらなきゃ…。アリシアの時と同じ。つきよを、解き放つてあげないと」

示し合わせたように、背中を合わせるなのはとフェイト。

「…アリサちゃんも助け出さなきゃね。絶対…生きてるから」

「…うん」

「…行くよっ！！」

まずフェイトが飛び出す。

四人の中で唯一バルディッシュ…刃による攻撃が使えるフェイト。拳で戦うアルフやハンマーのヴィータよりも、触手のようなタイプと戦ううえでは有利だった。

ちなみに砲撃手のなのはは本来クロスレンジよりもミドルレンジ（中距離）・ロングレンジ（遠距離）で活躍するタイプであるため、彼女にはあまり向いていないと言えよう。

アサルトフォーム（斧状の汎用形態）のバルディッシュを振り回し、群がる触手を片っ端から刈り取っていく。

同時にヴィータも動き出していた。彼女のデバイスは紅い鉄槌、鉄くろがねの伯爵『グラーフアイゼン』。バルディッシュと違って打撃武器であるため、今回の魔女のような触手タイプに対しては若干不利である。

「アイゼン、カートリッジロード！」

ウィータが指示を出し、これにんえて排莢するグラーファイゼン。

グラブアイゼンはすぐさま姿を変えた。片側のハンマーヘッドはスパイク状に、反対側は噴射口のように変化する。

噴射口が火を噴くと同時に、グラーファイゼン諸共回転を始めるヴィータ。回転はその勢いを増していき、程なくして一つの竜巻がでる。噴射口が一瞬ひときわ強く吠え、竜巻が動き始めた。

猛烈な台風となったヴィータが、辺りの触手を引きちぎっていく。フェイトとヴィータの猛攻により…なのは達のいる一帯が開けた。そして、彼女たちの瞳に…アリサが映り込む。

すかさずなのはが狙いをつけた。アリサのすぐ下……魔女本体との連結部を見据えて。

苦悶の表情を浮かべつつ、耐えるアルフ。

!!!!

砲撃が決まる。なのは達の魔法には非殺傷設定と呼ばれるものがあり、これをオンにすることで殺さずに敵に痛みと魔力ダメージを与えられる。魔女を消滅させることも可能だ。

それを見切り、飛び出したのは……アルフ。

アリサを抱きかかえて舞い戻る…が、アリサは気絶したまま、目を覚まさない。アリサに纏わりつく触手の切れ端が、切られてもなお生きているかのように蠢いている。

「目を覚ましてくれよ…アリサ…！」

呼びかけるアルフに、なのはは振り向かず口にする。

「…アルフはアリサちゃんを連れて離れて。つきよは…私たちが…！」

程なくして、なのは、フェイト、ヴィータが集合する。

三人の少女に、再び纏わりつくとうとする触手。そして武器を魔女に向けるなのは。

他の二人は襲う触手を払い、封じ…なのはの砲撃の補助を担当する。

なのは達には、つきよの触手が…何かを求めているようにも感じられた。

それは、新たな捕虜かもしれないし…もっと大切なものかもしれない。

「ごめんね…っ」

なのはがレイジングハートを、フェイトがバルディッシュを、ヴィータがグラーファイゼンを構える。

…まだ幼い彼女たちにとって、大切な人に武器を向けること…それがどんなに辛いことだろうか。

ほとんど会っていなかったヴィータさえ、はやてやなのは達の話聞いて…友達になりたいと思っていたのだ。

増して、なのはとフェイトは学校で楽しく話していた仲だった。

そのつきよを、今は…葬ろうとしているのだ。

「ごめんね、ごめんね、ごめんね…」

魔力をためるなのはから零れおちたのは、一滴の涙。
永遠にも思える数秒の間…なのはは、つきよと過ごした日々を思い返す。

何も知らなかったとき、みんなで楽しく談笑した思い出。

つきよが魔法少女だという事を知って、ギクシャクしてしまった思い出。

仲直りして、共に魔女と戦った思い出。

それらがなのはの心を駆け巡った。

…いつの間にか、つきよの攻撃が止んでいる。砲撃をその身に受けることを認めたように…。

『…………マスター、いきましよう。…ディバイン・バスター』

#12「傷跡」(前書き)

なんか今回内容がないです。
色々と虚無。ごめんなさい

#12「傷跡」

#12「傷跡」

聖？の、なのは達の教室。

少し前まで、そこには笑いの絶えない女の子六人のグループがあった。

しかし…今ここにいるのは六人に満たない。その上、彼女たちの顔から、笑顔が消えている。

「…つきよちゃん、幸せだったのかな…」

ずずかが口を開くも、誰もすぐには応えられない。

「正義の味方って…ほんまに報われへんの…？」

「…私たち、本当に何もできなかったのかな…」

ぽつぽつと独り言めいた言葉が出るだけで、口数があまりにも少ない。全員が現実打ちのめされているのだ。

教室に来なかった少女達。その存在が彼女達に深い影を落としている。

魔女となり、友達によって葬られたつきよ。

つきよに囚われていた影響で、未だに目を覚まさないアリサ。

……そして、誰よりも強く打ちひしがれて、学校に来る気力さえ失ってしまった…なのは。

「…アリサさんの体内に、つきよさんの使い魔が残っていたわ」
悲しい別れの後、気を失ったままのアリサが検査を受けた結果がリンディから伝えられる。

「意識回復はそれに阻害されているみたい。でも休眠状態のようだし、生命活動や魂を奪ってはいないみたいだから…命に別状はなさそうよ」

…つきよに囚われていた際、アリサは使い魔に寄生されていたのだ。
「いつ回復するかは分からない…取り除く方法も現状無し。今は本局で様子を見るために寝てもらっているわ。…さて」

リンディの話が変わる。

しかし、静まった…寂しい雰囲気は決して変わることが無かった。

「…私達は、忙しかったとはいえ…あなた達の事を疎かにしすぎた」

「不甲斐ない…っ！どうやって詫びればいいのかさえ分からないよ

…！！」

リンディと、その隣に立つクロノ。

時に冷徹な判断を下すこともある彼らだが、今は…涙を浮かべている。

「僕がもっと早く見つけていれば…もっと早く…」

無限書庫の後処理等、仕事が残っているユーノまでもが、つきよの

一件を聞いてこの場に来ていた。

「ユーノは悪くないわ。こちらの仕事を優先しすぎた、私の責任よ……」

落ち着いて言うリンディだったが、ユーノやクロノには無理して落ち着いていることが分かりきっている。

これは、偶然が重なって起こった悲劇だった。

そんな出来事であればあるほど、多くの人物が責任を感じてしまうものである。

「わたしの…せいだ…」

意外な方向からの声。そこにいた面々が振り向いた先には、うなだれたなのはの姿があった。

「わたしがあんな…様子を見ようなんて言っただから…！」

「なのは…ちゃん？」

「もっと早く行動していたらっ！無理やりにも人間に戻してあげていたらっ！つきよちゃんは助かったのに…っっ！！」

なのはが泣いている。

ジュエルシード事件の時も、闇の書事件の時も、九歳の女の子とは思えぬ大人びた態度を貫いていたなのはが、せきを切ったように泣き出していた。

決して駄々をこねた泣き方ではない。その姿はまさに…幼い少女が、悲しみに囚われた姿そのものだった。

「ちょ、ちよつと…あの時は仕方なかったし、なのはが責任感を感じることもなんて無いよ…！」

「でも…っ…！」

フェイトの慰めも、もはや我を忘れたなのはには聞こえない。

無理もなかった。なのはにとって、身近な存在を魔女として葬る…

それも自らが止めをさすことは初めてだったのだ。

フェイトにとつては、魔女化したアリシアとの戦い、そして最後の
一撃を経験済みである上…戦いを終えた直後、アリシアがフェイト
を『救っていた』。

生まれて初めての、大きな失敗と後悔。なのはただただ泣き続け
るしか無かった…。

「…なのはさん。つきよさんのグリーンフシード…貸しましょうか？」
「え？」

リンディからの意外な申し出に、なのはが反応する。

「これから仕事があるわけではないけど…少しでも早く、立ち直つ
てほしいの」

そこまで聞いて、少しだけ自分を取り戻した。

大泣きしていたなのはは自らを落ちつけると、少し考える。

「…いえ、わたしが持っけていても意味がないですから（わたし…弱
いな）」

こう言うのはだが…つきよのグリーンフシードを見ると、また泣き
出してしまう自分が目に浮かんでいた。それを逃れただけ、とも言
えるかもしれない。

「それじゃあ、僕がもらっておくよ」

来てはならない存在が姿を現した。管理局、そしてなのは達にとつ
ての諸悪の根源…インキュベーターである。

「キュウベえ…っ!？」

「今回はそのグリーンフシードをもらいに来ただけさ。別に悪用しな
いのは君たちだって分かっているだろうし、持っても仕方がない
じゃないか」

グリーンフシードをたまたま持っていたクロノが、苦虫をかみつぶし

たような表情でつきよの卵を投げる。

インキュベーターは背中を向ける…すると彼の背中に大きな穴があき、グリーンシードを飲み込んでいった。

彼に対して何をしてでも無駄であることが分かっているため、怒りをこらえる一同だが…

「…キュウベえさえいなければ、つきよちゃんは…っ！」

先ほどまで泣いていたなのはは怒りを我慢できず、感情をあらわにしていた。

「なのは。つきよは僕達の奇跡の力によって生き甲斐を得たんだ。前にも言ったように、どんな希望も条理にそぐわない限り、いつかは絶望になるんだよ」

「……」

インキュベーターにしてみれば、それは弁解でしかない。しかし、このことが幼いなのはの怒りを更に煽っていた。

「つきよの件は首尾よく魔女にできたわけだし、宇宙の寿命もその分伸びる。君達はつきよを失って絶望しているようだけど…もし君達が魔法少女だったらそれはそれは大きな絶望エネルギーが採取できたはずだ。それだけに残念だよ」

正直な、なのは達の心を全く考えないこの言葉で、なのはの中の何かが切れる。

「……………ッッッ！！うわああああああああああああああああああ！！！！！！！！」

いつものなのはからは考えられない声を上げ、掴みかかる。

…すぐに、引きちぎられた白い塊が出来上がった。

「…やれやれ、僕を殺しても無駄だって分かっているはずなのに。まあいいや、用は済んだから退散させてもらっよ」

どこからか聞こえる声。

インキュベーターは一匹殺しても、すぐに別の個体が現れる。どこから出てくるのか管理局にも分からないため、根絶が不可能なのだ。

ちなみに、新しい個体が古い個体を”食べている”姿も目撃されているという。

「うつつ…、うあああ……！！」

後に残ったのは、沈みきった雰囲気と、なのはの嗚咽だけだった。

…なのはは、いかなる困難をも乗り越えてきた。

ジュエルシード事件の時も、最終的にフェイトを救いだすことができて、そして…最も大切な友達になれた。

アリシアは結局死んでしまったが、何より…最終的にアリシアはフェイトを助け、身守られながら旅立つことができた。

闇の書事件の時も、はやてやヴォルケンリッターを助けることができ、フェイトはその時…魂とはいえ、偶然アリシアと再開していたのだ。

リインも最終的には消え去ったが、最後の瞬間まで…彼女は幸せだった。

だがつきよは…最後まで報われぬまま、その幕を閉じたのだ。

これは、なのはの魔導師人生で初めての…完全な失敗、完全な敗北である。

「なのは、入るよ」

…ベッドに横たわるなのはに、父親の声が聞こえた。

「……………」

返事が出ない。

「…昼ごはん、置いておくから」

「……………」

「今日、フェイトちゃんが来るって」

「……………」

「…気にするな、なんて言わない。でも、みんな…なのはの味方だから。じゃあね…」

「……………」

みんな、味方。

そんなの分かってる。キユウベえを除けば敵なんていないのだ。

でも…だからこそ、立ちあがれないのだ。

「…私が、とどめを刺すべきだったのかな…」

教室で、初めてフェイトが口を開いた。

「フェイト、ちゃん…」

返事を待つフェイト。しかし誰からも声は出ない。

何が間違っていたのか、誰が間違っていたのか。それは誰の目にも…少女達はもちろん、クロノやリンディにさえも見えていないのだ。…いや、関わった者は例外なく何かしらの責任を感じている。あのような結末になり、誰よりも自分が悪いと思ってしまったのだろう。…「…なのはちゃんのご家族には、話してあるん？」

「うん、流石に管理局のことを言っただけだから…すぐ信じてくれた」

闇の書事件の直後、なのははアリサやすずかの他に、家族にも管理局の事を打ち明けていた。

身分を隠していたとはいえ既にリンディ達とも面識があったので、すんなり受け入れていたという過去がある。

「……………」

会話が続かない。

グループの中でもテンションの高かったのはとアリサ。彼女達が抜けていることも、暗い雰囲気を作る一要素だった。

「…アリサちゃんも、大丈夫かな…」

話題を変えようとしたのか、すずかが呟く。

現在は本局に保護されているものの、未だ昏睡状態から回復していない。

生命の危険はないが、治る見通しが立たなければ…ずっとこのまま、植物状態で生き続けるしかないのだ。

「き、きつと大丈夫やから…」

「……」

それっきり、会話が完全に途絶えていた。

何事もない日常というのは、しばしば幸福の象徴とされる。

しかし、彼女達にとってのこの日は…悪い意味で、何もなかった。

ただただ、虚無感に支配された一日。

果たしてこの日々は、いつまで続くのだろう…

「……これは…、どうして前触れもなく突然素質が？…でも、これほどの因果…使わない選択肢はない。行くとしよう、見滝原に」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2795w/>

魔法少女なのは マギカW ~ 希望の道標 ~

2011年12月1日21時53分発行